大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

『平常流機道問答』について（一）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 早紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017292

『平常流機道問答』について（一）

池内　早紀子

１．はじめに

２０１８年８月長野仁氏より、『平常流機道問答』[1]という古医書の画像が公開されているとの連絡を受けた。長野氏によれば、この書の内容より「後藤艮山（ごとうこんざん）の一気溜滞説を踏まえた形で、道教的な身体技法が鍼治療に活用されているのではないか。これを論証できれば、道教の受容史という側面からも意義深い。」とのことであった。

近年、多くの古書籍がｗｅｂ上で公開され我々は大いにその恩恵を受けるようになった。整備がすすむ国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースから容易にキーワード検索などができることもありがたい。退蔵され、いままで研究の対象となってこなかった資料にも目を向ける機会が生まれる。日本古典籍総合目録データベースにおいて、この『平常流機道問答』は「鍼灸」に分類されている。「当流鍼道」（十丁オモテ）、「愚ハ鍼ヲ家行トスレバ……」（三十一丁オモテ）などとあるからであろう。しかし内容には、鍼をもちいた技法は一切なく管を用いた独自の呼吸法などの種々多数の呼吸法が解説される異色の書となっている。また「唯人ハ一気凝滞依リテ病ム」（一丁オモテ）とある。病は一気の凝滞により生じるとし、その解消、防止のために呼吸法を用いるとしている。さらに独自の管を使った呼吸法では治病にも言及し、従来の養生書とはかなり異なる。

ところで長野氏のいう「後藤艮山の一気溜滞説」であるが、後藤艮山（ごとうこんざん）（１６５９・万治２年～１７３３・享保１８年）は、江戸中期頃におこった古方派の先駆けの一人であり、病気の原因は「一元気の滞り」（一気留滞説）であると唱えた[2]。湯治や熊膽（ゆうたん）（くまのい）・

---

[1] http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_3941411

[2] 『艮山先生医教解』、大塚敬節、矢数道明編『近世漢方医学集成 13』、名著出版、1979 年、pp.141-156 に「〇凡ソ医ヲ知ラント欲スル者ハ」「〇先ズ包義ノ義皇ニ起コリ、菜穀ノ神農ニ出ズルヲ察シ」「〇法ヲ素靈八十一難ノ正語ニ取リ、ソノ空論雑説文義ノ通ジ難キモノヲ捨テ」「〇漢唐ノ張機、葛洪、巣元方、孫思邈、王燾ラノ書ヲ渉猟シ、宋明諸家ノ陰陽旺相、府蔵分配区々ノ弁ニ惑ワズ」「〇百病ハ一気ノ留滞ニ生ズルコトヲ識ラバ則チ思イ半バニ過ギント云フ」などとある。
『師説筆記』、同上書、pp.18-19 に「凡病ノ生ズル風、寒、湿ニヨレバ其気滞リ、飲食ニヨルモ皆一元気ノ留滞ヨリナルコトナリ。故其ササユルモノハ如此チガヘドモ、其相手ニナリテ滞トコロハ一元気ナリ」とある。これらの言において、宋明諸家の弁に惑わず漢唐の書を渉猟するといったことから、古方派の先駆けの一人とされる。また百病は一気の留滞により生ずると言ったことから「一気溜滞説」を唱えたとされる。

番椒（とうがらし）などの民間薬をよく用い灸も多用したことでもしられる[3]。

つぎに「道教的な身体技法が鍼治療に活用」については、一般的に鍼灸や漢方の臨床において道教との係わりを言われることはあまりない。しかし思想史的には中国医学（東洋医学）の基本書とされる『黄帝内経素問』『黄帝内経霊枢』は「黄帝」の名を冠しているなど、道家思想や道教思想と係わりが深いとされる[4]。宮澤正順『素問・霊枢』[5]は、特に『黄帝内経素問素問』『黄帝内経霊枢』と道家・神仙・道教の諸思想との関連に注目して論じている。

一方近世日本の呼吸法に関する論考がすでにいくつかある[6]。鎌田茂雄は『気の伝統』において、日本・中国の呼吸法を取り上げたうえで、白隠の丹田呼吸法、貝原益軒『養生訓』、平田篤胤『志都之岩屋』、平野重誠『養生訣』などの呼吸法が近代の岡田式静座法や調和道の丹田呼吸法に受け継がれたとする[7]。さらに野村英登はこの白隠の修養法は道教の修養法である内丹と深く関わるものであることを論じている[8]。

では呼吸法（調気法）を詳細に論じ提唱する流儀書『平常流機道問答』は、どの様な人物により、何に依拠し、いかなる意図をもって書かれた書なのだろうか。拙稿では、まずこの書の概略を述べ、次に三篇に分かれる此の書の第一の篇「平常流機道問答」を翻字して示し、考察を加えたいと思う。

２．『平常流機道問答』概略

日本古典籍総合目録データベースによれば「『平常流機道問答』（へいじょうりゅうきどうもんどう）」は、「巻冊：一冊、分類：鍼灸、成立年：安永四、国書所在：【写】慶大富士

---

[3] 花輪壽彦「後藤艮山」、小曽戸洋監修『漢方医人列伝』、協和企画、2015 年。

[4] 現行本に至るまでの書誌などについての考察は、浦山きか『中國醫書の文獻學的研究』、汲古書院、2014 年、真柳誠『黄帝医籍研究』、汲古書院、2014 年に詳しい。

[5] 宮澤正順『素問・霊枢』中国古典新書続編 18、明徳出版社、1994 年。

[6] 笠井哲「白隠の丹田呼吸法の系譜」、『印度學佛教學研究』51(2)、2003 年、pp. 688-693。片渕美穂子「気めぐる身体―近世前期養生論における陰陽五行―」『和歌山大学教育学部紀要　人文科学』第 60 集、2010 年、pp. 47-57。山崎律子「平野重誠の呼吸法に関する一考察―江戸時代後期の著『病家須知』を中心に―」、『福岡県立大学看護学研究紀要』8 (2)、2011 年、pp. 61-66。片渕美穂子「近世養生思想における呼吸法と丹田」、『和歌山大学教育学部紀要、人文科学』第 64 集、2014 年、pp. 111-119。

[7] 鎌田茂雄『気の伝統―調息法を中心にして―』、人文書院、1996 年、p. 169。この書には、仏典に説かれた調息法、天台大師の調息法、道教の調気法、日本仏教の調息法、白隠禅師の調息法、そして調息法の継承と発展が書かれる。「調息法の継承と発展」p. 169 では、「白隠の『夜船閑話』で説かれた内観の秘法はその後多くの人々に継承された。それは貝原益軒、平田篤胤、平野重誠、佐藤一斎などが説いた調息法である。その流れは調和道の創始者藤田霊斎に受けつがれ、大成されるに至ったのである」と書かれている。ただし白隠『夜船閑話』より貝原益軒の方が古く、この流れについては再考の必要がある。

[8] 野村英登「白隠の修養法と道教の錬金術―内観・軟酥の法と内丹―」『花園大学国際禅学研究所論叢』第一号、2006 年、pp. 247-265。

川、著作種：和古書、国書：『国書総目録』所収，１、形態：５７丁，１５×２０ｃｍ，１冊」とある。富士川游（１８６５－１９４０年）は、和漢の古医書を蒐集し『日本医学史』、『日本疫病史』などを著し、日本の医史学を確立した。これらの医学史編集にあたり集められた彼の蔵書は「富士川文庫」として京都大学、慶應義塾大学に分散して所蔵される。拙稿で取り上げる『平常流機道問答』は、この慶應義塾大学所蔵の写本である。データベースにあるように『国書総目録』に収録されている[9]。ただし富士川、『日本医学史』の医書目録には採録されていない。

表紙１丁、本文５７丁、裏表紙１丁の合計５９丁からなり、表紙左上に外題『平常流機道問答』（題簽）がある。本文は漢字片かな交じりで書かれ、①「平常流機道問答」３４丁、②「無病修真丹」１０丁、白紙１丁、③「平生流機道秘書」１２丁の三部より構成される。末尾第５７丁には「安永四未歳霜月」とあることから、おそらく１７７５年１１月ごろに書かれたものであろう。筆者の記名等はなく著者は不詳である。

次に本文の三篇、①～③を概説してみたい。

①「平常流機道問答」

「平常流機道問答」は「問曰」（門人問て曰く）に対し「答曰」（答えて曰く）という『黄帝内経素問』等に見られる問答形式となっている。合計４０問答ある。

冒頭は、次のように始まる。

「門人問曰、本艸ノ序例ニ曰、醫ハ意也[10]。又平人氣象論ニ曰、常ニ以レ不レ病調ニ病メル人一、醫ハ不レ病、故爲ニ病人一平ニシテレ息以調レ之爲レ法[11]。是何如可ニ心得一。」

（門人問いて曰く、「本草の序例に曰く、医は意也と。平人気象論に曰く、常に病まざるを以て病める人を調（うかが）う。医は病まず。故に病める人の為に息を平にして以てこれを調（うかが）うを法となすと。是れ何如に心得う可きや」）[12]

この第一の問いに対して、次のように答える。

「答曰醫ハ意トハ本神篇曰所ニ以任一レ物ニ者ハ謂ニ之心ト一。心ニ有レ所レ憶謂ニ之意一。意之所レ存謂ニ之志一。因レ志存スレ變ヲ、謂ニ之思一。因レ思而遠慕ヲ謂ニ之慮一。因レ慮而處ルレ物、謂ニ

[9] 国書研究室編『国書総目録』補訂版 7巻、岩波書店、1989～1991 年、p. 199。

[10] 「醫者意也」、和刻本『重刊證類本草序例』、寛永 16（1639）年、早稲田大学図書館蔵、二十三丁オモテにみえる。この「医は意なり」に関しては舘野正美「〈医は意なり〉攷―医学思想的観点から―」『日本医史学雑誌』第 45 巻第 1 号、1999 年、pp. 134-135。舘野正美「孫思邈の医学思想」『研究紀要』（100）、日本大学文理学部人文科学研究所、2020 年、pp. 21-42 に論考がある。

[11] 『黄帝内経素問』「平人気象論」に「平人者、不病也。常以不病調病人、醫不病、故為病人平息以調之為法」

[12] 拙稿では、原文は正字体を用い、訓読は常用漢字を用い現代仮名遣いにあらためた。

之智一。故智者養生也ト」

（答えて曰く、醫は意とは「本神篇」に曰く「物に任(にな)う所以の者はこれを心と謂う」と。「心に憶する所あるこれを意と謂う。意の存する所これを志と謂う。志に因りて変を存するこれを思と謂う。思に因りて遠慕するをこれを慮と謂う。慮に因りて物を処するこれを智と謂う。故に智者養生なり」と）[13]

ここでは、さらに病が一気凝滞に起因すると答える。

「唯人ハ一氣凝滞依テ病ム」（唯人は一気凝滞に依りて病む）
「其一氣無凝滞則以息自平也」（其の一気凝滞無くば、則ち息を以て自ら平らかなり）

そして第３０問答では一気凝滞を解く八法は『鍼灸大全』の八法の奥旨を得て案じた理論だと述べる。

「其八法之理ハ、鍼灸大全八法ノ奥旨（旨）ヲ得テ、此ノ八法ノ法ヲ按（按）シテ診ミテ、是ヲ法トス。」

（其の八法の理は、『鍼灸大全』八法の奥旨を得て、此の八法の法を按じて診(こころ)みて是を法とす）

次の第３１問答は、具体的にこの方法を記載する。

「細キ竹ノ二寸計ナル管ヲ以、口ノ八法ヲ氣ヲツヨリメテソロくト吹クヘシ」

（細き竹の二寸ばかりなる管を以て、口の八方を気をつより（く）つめてソロソロと吹くべし）

加えてこの竹の管を口にくわえ息を八方向にゆっくりと吐く方法（八法）を図示して説明している。さらに、第３２問答では頭痛、左の足痛などに対する治療を１４条にわたり記載する。「当流の鍼道」というが、鍼を用いる技法には、一切言及することなく呼吸法（調気法）のみである。

②「無病修真丹」

次の本文第３５丁オモテよりはじまる「無病修真丹」は、冒頭は以下のようにある。

---

[13] （ ）内の読みは本文の読みによった。『黄帝内経霊枢』「本神篇」に「所以任物者謂之心、心有所憶謂之意、意之所存謂之志、因志而存變謂之思、因思而遠慕謂之慮、因慮而處物謂之智。故智者之也」とある。ここでは「故之養生也」（故に智はこれ生を養うなり）となっている。

「家傳　無病修真丹者愚師圓水先生ハ百餘歳ニシテ動作不衰。自己ヲツクシテ其道ヲ知。諸道ニ通達シ信ニ樂ミツキサルノ一法、然トモ其道ヲ知テ外ニアラワサス。或時語曰此一法理玄妙ナリ信シテ修行スヘシト余ニ無病修真丹ノ一法授タマウ。人身要ハ法理在リ、故ニ今其理ヲ圖シテ一書スルノミ」

（家傳の無病修真丹は愚の師圓水先生は百余歳にして動作衰えず。自己をつくして其の道を知る。諸道に通達し信に樂しみつきざるの一法。然れども其の道を知りて外にあらわさず。或る時、語りて曰く此の一法の理は玄妙なり。信じて修行すべしと余に無病修真丹の一法を授けたまう。人身の要（かなめ）は八法の理に在り、故に今其の理を図（しる）して一書するのみ）

引書として「甲乙経」[14]、「本草序例」[15]、「平人気象論」[16]、「本神篇」[17]、「八難」[18]、「熊宗立」[19]、「聚英」[20]、「内経」[21]、「類注」[22]、「老子」（『老子』）などをあげ、二十一条の文章をのせる。

例えば『類経』注（「類注」）を典拠としている箇所を以下に示す。

「執道者德全、德全者形全、形全者聖人之道也」

（道を執る者は德全し、德全きは形（かたち）全し、形全き者は聖人の道なり）

「方揚曰、凡亡於中者、未有不取足於外者也。故善養物者守根、善養生者守息、此

14　『鍼灸甲乙経』、原名『黄帝三部鍼灸甲乙経』、略称『甲乙経』。皇甫謐 259 年頃撰。『素問』『鍼経』（『霊枢』の古名）『明堂孔穴鍼灸治要』の三書を分類し再編したもの。1648 年に和刻。

15　『本草序例』。小曽戸洋『日本漢方典籍辞典』、大修館書店 1999 年、p. 352 に「『本草序例』は『証類本草』の序例部分のみを単行したもので、『証類本草』渡来以来『本草綱目』の伝来までわが国で本草の教科書として学習された」。1612、1639、1644、1801 年に和刻。

16　『黄帝内経素問』「平人気象論篇　十八」。

17　『黄帝内経霊枢』「本神篇　第八」。

18　『黄帝八十一難経』「八難」。

19　「熊宗立」（1415～1487 年）明の医学者。福建建陽の人。編著に『医書大全』『黄帝内経素問霊枢運気音釋補遺』『勿聴子俗解八十一難経』『傷寒運気全書』『王叔和脈訣図要俗解』『類証注釈銭氏小児方訣』などがある。『名方類証医書大全』、略称『医書大全』24 巻、1446 年刊。『医書大全』の和刻（1528 年）は、日本で最初の医学書の印刷出版である。『平常流機道問答』の「萬物所生、必有其原。夫人生気之原者、腎間ノ動氣是也。腎之動脈存足内踝骨ノ上。動脈陷（陥）中。名曰太谿ノ穴」は『勿聴子俗解八十一難経』八難の注からの引用である。

20　『鍼灸聚英』、明の高武撰。1529 年刊。1640、1643、1645、1651 年に和刻。

21　『黄帝内経』。「上古天真論篇第一」「恬淡虚无真氣從之精神内守病安從來」。

22　『類経』の注。『類経』32 巻は明の張介賓撰。1624 年刊。『黄帝内経』中の『素問』と『霊枢』の二書の内容を整理・類別し改編し注釈を加えたもの。

言養氣當從呼吸也」

（方揚曰く、凡そ中に亡う者、未だ外に足るを取らざる者有らざるなり。故に善く物を養う者は根を守り、善く生を養う者は息を守ると、此の言、気を養うは当に呼吸に従(よ)るなり）

「曹真人曰、神ハ是性分炁是命、神不外馳炁自定」

（曹真人曰く、神は是れ性、気は是れ命、神　外に馳せざれば気自(おのずか)ら定む）

「張虚靜曰、神若出、便收來、神返身中、炁自回。此言守神以養炁也」

（張虚静曰く、神若し出づれば、便ち収来し、神身中に返れば、気自(おのずか)ら回る。此れ神を守りて以て気を養うを言うなり）

これらは『類経』巻一「摂生」にある以下の文の注釈である。

「上古聖人之教下　素問上古天真論二」の

「所以能年皆度百歳而動作不衰者、以其德全不危也」[23]

（能く年　皆百歳を度(こ)えて動作衰えざる所以(ゆえん)の者は、其の德全くして危うからざるを以てなり）

「古有真人至人聖人賢人　素問上古天真論三」の

「呼吸精氣、獨立守神、肌肉若一」[24]

（精気を呼吸し、独立して神を守り、肌肉一の若し）

これらの引用箇所は、いずれも道家思想と関係が深い。

また引書を明記しないが『荘子』等からの引用もある。たとえば『荘子』「夏蟲不可以語於冰者、篤於時也。曲士不可以語於道者、束於教也」[25]（夏虫の以て氷を語る可からずとは、時に篤(あつ)ければなり。曲士の以て道を語る可からずとは、教えに束ねられるればなり）を引用して次のように書かれている。

「曰、夏虫ハ不足語氷、曲士不足語道」

（曰く、夏虫は氷を語るに足らず、曲士は道を語るに足らず）

そのほか篇名にある「修真丹」や、文中にある「煉丹」の語などからは道教との関連が

---

[23] 張介賓『張氏類經』、新文豊出版公司、1976 年、p. 3。
[24] 同上。
[25] 金谷治訳註『荘子第二冊（外篇）ワイド版』、岩波書店、1994 年、p. 242。

伺え、内容は道家思想や道教思想を取り込んだものとなっている。

一方、所々に「古歌曰……」とあり源空上人（法然）の「月カケノテラサヌ里ハナケレトモナカムル人ノ心ニソスム」[26]や、一休宗純「ワケノホルフモトノ道ハヲヽケレト同シ高根ノ月ヲミル哉」[27]などの、いわゆる道歌[28]とよばれる種類の歌を書き添えている。禅的な要素も含み、仏教の影響がうかがわれる。また「愚の師圓水先生」と記される「圓水」も仏僧の可能性がある。これについては稿を改め論じたい。

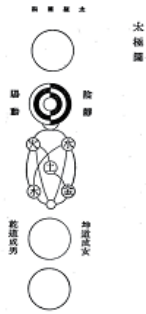
③「平生流機道秘書」

最後の篇である「平生流機道秘書」は、平らかなる気が重要であり、気の変により一気凝滞し病になると再度述べ、数多くの呼吸法（調気法）を記載する。ただし篇名の流派の表記が異なり、「平常」が「平生」となっている。

調気法はまず「呼氣」「一氣」「両氣」「四氣」「六氣」「八気」、「五行之氣」として「木勢氣」「火勢氣」「土勢氣」「金勢氣」「水勢氣」、「八法氣」として「不動氣」「支利氣」「隠氣」「飛勢氣」「陰勢氣」「陽勢氣」「進勢氣」「退勢氣」の１３種の法を挙げている。その他に２０条にわたり様々な「氣」（調気）の法を解説する。「勢」は、『日本国語大辞典』では「かたち、ありさま」とある。鍼灸入江流の流儀書では、鍼の手技として「風勢」「火勢」「意勢」などの「十五勢」があり、これらは杉山真伝流にも受け継がれるている[29]が、これとの関係は不明である。

「〇如此口ヲ圓ニ明ク時ハ一太極ナリ無極ナリ是無心ナリ」（〇、此の如く、口を円に明く時は、一太極なり、無極なり、是れ無心なり）との記述がある。

これは周濂溪『太極図説』の「太極図」（図Ａ）に、朱熹が解釈を施した『朱子太極図解』にある「〇此所謂無極而太極也」（〇此れ所謂、無極にして太極なり）[30]に依拠しているのであろう。



図Ａ

呼気、吸気ともに、様々な「氣」（調気法）を記載した後、末文は以下のよ

26　「月影の照らさぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ」。「つきかげの到らぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ」は、「源空上人」即ち法然の歌とされる。ただしこれについては異なる意見もある。袴谷憲昭「道歌と仏教文学」『駒澤大學佛教文學研究 21』2018 年、pp. 117-140 の注釈を参照。

27　一休宗純撰『一休骸骨』、早稲田大学図書館蔵、5 丁オモテに、「分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見る哉」とある。室町時代、臨済宗大徳寺派の僧、一休宗純の歌とされる。

28　「道歌」は『日本国語大辞典』、小学館に「道徳的な教訓をわかりやすく説き、精神修養のことを詠んだ和歌」と説明される。

29　大浦慈観、長野仁『皆伝・入江流鍼術―入江中務少輔御相伝針之書の覆刻と研究』、六然社、2002 年、pp. 56-59。

30　西晋一郎、小糸夏次郎『太極図説・通書・西銘・正蒙』、岩波書店、1986 年、pp. 17-18。

うに、終わる。

「右二十ヶ条、皆何レモ體用一ノ平氣ヲ以此氣ヲ修ル也。此外種々ノ氣有レトモ略之。一巻不殘口傳ナリ。當流此氣ノ巻ヲ以萬事ニワタリ一身ニ氣ヲ充シム。三十六氣トモ阿ノ一字ヲ以息氣ヲ充ナリ。一身ヲ平等ニシテ萬気安クス。秘傳、可秘々。

安永四未歳　霜月」

（右二十ヶ条、皆何れも体用一の平気を以って此の気を修むるなり。此の外、種々の気有れども之を略す。一巻残らず口伝なり。当流、此の気の巻を以って万事にわたり一身に気を充たしむ。三十六気とも阿の一字を以て息気を充たすなり。一身を平等にして万気安くす。秘伝なれば秘々にすべし。　安永四未歳　霜月）」

「當流此気ノ巻ヲ以萬事ニワタリ一身ニ氣ヲ充シム」と、当流はこの気の巻を以って、万事にわたり一身に気を充たしめるという。最後に「一巻不殘口傳」と、一巻残らず口伝であり、「秘傳、可秘々」と秘伝であるから秘密にしなければならないと書き記す。書写した人などの人名は書かれておらず年月のみである。

此の篇においても「一身に気を充たしめる」ことで、凝滞を解消できると考えているのであろう。臍下丹田を強調する養生書とは、やはり異なるようにみえる。

以上の①～③篇をみると、『平常流機道問答」は鍼灸の流儀書ではあるが、医書、養生書に論拠をおき、儒仏道の要素を加味して書き上げられた書であり、実際は調気法の専書となっている。

３．「平常流機道問答」翻字

次に、三篇から構成される内の最初の篇、①「平常流機道問答」を翻字して示したい。

【凡例】

一、これは、慶應義塾大学所蔵『平常流機道問答』（へいじょうりゅうきどうもんどう）の本文第一丁から第三十四丁にある「平常流機道問答」を翻字したものである。

一、漢字片カナ交じりで書かれる文字の漢字は正字体にこれを改めた。本文の右にある送り仮名は上付きに、左にある訓讀点は下付にした。適宜、句読点を附したのは翻字者による。

一、合字は、これを「シテ」「トモ」などのカナに改めた。

一、虫損などにより判読困難な箇所は□を用い続く（）中に、候補を挙げた。

一、誤字と思われる箇所は、続く（）内に候補を挙げた。

一、問答には問答の冒頭に［問答０１］～［問答４０］の番号を施し、図にもそれぞれ番号を附した。八法の気は（０１）～（０８）で示した。

一、原本と対照できるように、本文中にその該当丁数を表記した。例えば本文一丁表の末は、」一丁オと表した。読む際の便宜を考え、記載される箇所を本文　丁と適宜挿入した。

【「平常流機道問答」翻字】

表紙
平常流機道問答

本文
本文一丁

平常流機道問答

［問答０１］
門人問曰、本艸ノ序例ニ曰醫ハ意也。又平人氣象論ニ曰、常ニ以レ不レ病調ニ病メル人一醫ハ不レ病故爲ニ病人一平ニシテレ息以調レ之爲レ法、是何如可ニ心得一。答曰、醫ハ意トハ、本神篇曰、所ニ以任一レ物ニ者ハ謂ニ之心ト一、心ニ有レ所レ憶謂ニ之意一、意之所レ存謂ニ之志一、因レ志存スレ變ヲ謂ニ之思一、因レ思而遠慕ク調（謂）ニ之慮一、因レ慮而處ルレ物謂ニ之智一、故智者養生也ト、在リ。私曰、不レ病者ト云トテ、如ニ木石一ナランヤ。唯人ハ一氣凝滯」一丁オ依テ病ム。其一氣無凝滯、則以息自平也。其一氣凝滯スル者ハ陰陽五行ニ非ト云事ナシ。

［問答０２］
問曰、滑伯仁曰、天下之物理有レ感、有レ傳。感者情也。傳者氣也。有レハレ情斯レ有レ感。有レハレ氣斯レ有レ傳。今夫五臟之積特（タヽヂニ）以ニ氣之所一レ勝傳所不勝云ハ何如。答曰、人物二感ル則ハ自氣ノ凝滯ヲナス。其凝滯ニ依テ七情是ヨリ發シ、又七情ニ依テ氣ヲ凝滯ス。傳ル者トハ陰陽五行凝滯ス、故有感有ト」一丁ウ傳云フナリ。

本文二丁
［問答０３］
問曰、感傳在テ、其凝滯ヲ診事何如。答曰、其氣凝滯スル者ヲ診ニハ、五行相生相克之理ヲ診フ。陰陽五行ハ、甲乙丙丁戊巳庚辛壬癸是十干也。一氣、此十ニ住マル時ハ不病事ナシ。醫ハ不レ病ト云ハ、此十ニ住マラサルノ平等ヲ以云フナリ。

［問答０４］

問曰、十ニ住ラサル時ハ何故ニ人不レ病。答曰、人ハ一氣ニシテ水火和合シテ無病是陰陽和平ニシテ無病ノ人ト云也。十干ニ住マラサルノ脈ヲ無」二丁オレ病脈トス。十干ニ凝止ル時ハ病ム。是ヲ診ニハ脈ヲ以ス少シニテモ止マルノ脈アル時ハ無病ニ非。

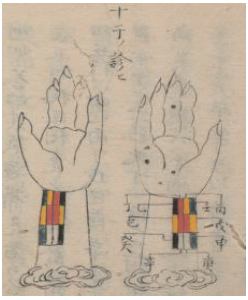


図 01

十干ノ診ヒ【図０１】

如此、十干ヲ診事、祕事也。是時診本艸綱目ノ脈學奇經之論」二丁ウヲ以診得タリ。息平ナルヲ診ニハ、此理ヲ以是ヲ診フ、此理ヲ不レ知者ハ和平ノ人ヲ知事難レ成。文字言語ヲ以云トテ、取ニ足ランヤ、信スベケンヤ。

本文三丁

［問答０５］

問曰、十干ノ診ヲ知時ハ、陰陽和平ノ病マサル人ノ診ヲ知ル、地ノ十二支ノ診ハ不ルカレ入。答曰、天干ニサエハナレテ、不二凝滯一之人ノ十二支ニ病ノ理ナシ。故ニ十干ヲ以云フナリ。五行相生相克ニ病マサルノ人、十二時ニ病ム事ナシ。」三丁オ

［問答０６］

問曰、人身病一氣ノ凝滯ヨリ生ス。其凝滯スル事何如。答曰、氣動スルルカ故ニ病外ニ生シ、氣動スルカ故病内ニ生シ、氣動セサルカ故ニ病外ニ生シ、氣不レ動故ニ病内ニ生ス。

［問答０７］

問曰、氣ハ何故ニ動ス。答曰、志意不レ和、故ニ氣是カ爲ニ動ヲナス。氣動シテ十干之内ニ凝滯シテ病ヲナス。

［問答０８］

問曰、氣動シテ、十干ノ内ニ凝時ハ、皆病トナル。十干ノ内不レ凝時ハ不ルカレ病。答曰、一氣無ク二凝滯一病ムモノハ、是心ノ病ナリ。然トモ心神氣ハ一物ニシテ」三丁ウ自然ノ妙道ナリ。心神氣ハ息ニツレテ周身ヲ周流ス。病メル者ハ一氣ノ凝滯也。以息不レ平、故ニ病メル人ノ爲ニ息平ニストハ、息ハ則、自ラノ心ト書クナリ。人靜ニ内エ息ヲ納ル時ハ、心神氣、心包之内ニヲサマル。其心包モ形有ルニ非ス。自然ノ妙道ニシテ、名存テ形ナシ。經ハ手厥陰心包絡ノ經ナリ。

本文四丁

［問答０９］
問曰、或人曰、臍下氣海丹田ノ間ニ氣ヲ凝ラシムルノ論アリ。是ハ何如ニ心得ヘキヤ。答曰、臍下氣海」四丁オ丹田ハ腎經ノ間ノ氣タル、故ニ腎間ノ動氣ト云也。六十六ノ難ニ曰、臍下腎間ノ動氣ハ、人ノ生命也。十二經ノ根本ナリ。二十五難曰、心主ト與三焦ト爲ニ表裏一、俱有レ名而無形。私曰、腎間之動氣ハ、三焦之原也。凝シムル時ハ、裏ノ心包、何ヲ以テ其用ヲナサン。三焦ハ心ノ別使ナリ。俱ニ有レ名無レ形、是則妙道ニシテ、何ソ凝ラシムルノ理アランヤ。

［問答１０］
問曰、臍下氣海丹田エ氣充シムルニイカヽ心得ヘキヤ。答曰靈樞邪容」四丁ウ篇[31]曰、諸邪之心ニ在者ハ心ノ包絡ニ在リト云ハ心ノ病ト云、皆眞陽氣ノ働之沙汰ナリ。諸邪ノ爲ニ其働キカ妨ケラレテ煩フナリ。氣海丹田エ氣ヲ充ルニ、息ヲ以臍下丹田ニ充シムル時ハ、自ラ周身ニ周流シテ、其息平カニナル。曰、腎間動氣ハ呼吸ノ門ト云、一名守邪ノ神ト云。呼吸ヲ以内ニヲサムルニ主方種々有、可考。呼吸ノ門ト云義、有テレ名無レ形ノ門ナレハ、此門□（モ）有レ名無形之門ナリ。無門ノ門ナリ。意心傳心ノ門ナリ。」五丁オ此門ヲ知ル時ハ、氣海ノ海モシレ、汐ノ滿干モ知ルテアロウゾ。此門ノ内ニ入時ハ、醫ハ意ナリノ所急度知ル事疑ヒナシ。此門内ノ廣大成、理ヲ語レハ多ハ通セサル、故ニ體ノナキ事ナリトイエル人アリ。有レ名無レ形ノ土地ナレハ、得カタケレハ體ナシト思フモ、最成ト思エリ、シカシ知ル人ハシレハ體ナシトモ云カタシ。知ル人モ又大笑セン利益ハカリカタシ。

本文五丁
［問答１１］
問曰、諸方ニ調氣ノ法有テ、氣ヲ引腹ヲ張リ充ル方有。丹田ニ氣」五丁ウヲ置ナトノ説有、是モ用ヒテ宜ヤ。答曰、虚空ニ向テ氣ヲ引モ、内ノ呼吸ヲ納メンカ爲ナリ。又至言等ヲ怠リナク勤ルモ亦呼吸ヲヲサメンカ爲ナリ。其氣ヲ閉テ物ヲ觀スル等ノ法、數多アリ。皆呼吸ヲ内ニヲサムル法ナリ、シカシ他ニ氣ヲ散ル時ハ、何ホト氣閉テ充ルトモ、外形エ氣ヲ充ノ心有テハ、却テ凝滯アル者ハ凝滯ヲ益シテ、其理益行□□[32]キ難シ。故後ニ却テ病ヲ生スル者有、故ニ都テ調氣」六丁オノ道ハイラサル者ト思フ者多シ。何ノ道ニモ息ヲ周心ニ充ルノ理ヲ知リ呼吸トモニ内ニ歸セシムル時ハ、其氣ヲ益シ、水火和合ハ自然ノ道也。能々思惟スヘシ。其他念ナク充ノ法有、可レ考也。心神精氣ハ一氣成ト知リタル計ニテ、何ノ用ニタヽヌト捨ル時ハ、是不レ得也。得タル時ハ捨ルノ理ナシ、一大事ナリ。

---

31 「靈樞邪容篇」は、靈樞邪客篇の誤り。

32 難読部分は以下の画像部分。左に 90 度回転させている。

本文六丁

［問答１２］

問曰、臍下丹田ニ呼吸ヲ充ル時ハ意ヲ知ルトハ、何如ン。答曰、意ハ立タル心ヲ云フト制シタル文字ナリ。意ノ工夫」六丁ウニ三段アリ。意ハ立タル心トヨミ、立ハ住ルトヨム。心ニ住（トヽマル）ノ心ヲ云フトヨミ、工夫スルニアリ。又人ノ主心ト云ノ心也。又立ノ心ト云フトヨミ、工夫スルニアリ。是兩段ナリ。呼吸ヲ充ルニ、此兩段ヲ知ル人ノ立タル形ノ心、是則意也。我カ心ノ主人公ニ住ルノ心、是則意ナリ。又兩段ヲ知テ、醫ハ意ヲ以テ其凝滯ヲ療養スルノ意ヲ知ル。是三段ナリ。三意則一意也。醫ハ意ニシテ、意ハ信ト心ナリ。

本文七丁

［問答１３］

問曰、臍下氣海丹田エ氣ヲ充ル」七丁オノ時、意何如心得ヘキヤ。答曰、臍下氣海丹田エ氣ヲ充タシメントスルニ、臍下エ氣ヲヤラントスレトモ、初ハ呼吸ヲ内ニヲサマルヤウニハ成カタク、多クハ氣トヽカサルモノナリ。

［問答１４］

問曰、臍下氣海丹田ヲ腎間ノ動氣トイエルハ何如。答曰、腎間ノ動氣ハ常ニ動スルニ非。人ハ動物ノ靈萬物ノ先カケタル、此一氣ヲ以動氣ト云也。氣海ハ臍下一寸五分、丹田ハ二寸也。腎經ノ間ノ一空ニ自然ト根サス。水火ヲ以一身ニ布施ス。」七丁ウ水火本一氣ナリ。故ニ人身ノ病ヒ一氣ノ凝滯ニヨル。愚流鍼道ノ體意也。可レ考可レ憶。

本文八丁

［問答１５］

問曰、初心ニ、氣ヲ丹田ニ充スニ、其氣ヲ早ク得ルノ法アリヤ。答曰、夫　醫之道ハ其初、伏義神農黄帝之明君賢佐アリテ、萬世不易ノ道ニシテ其數術是ヨリ分テ世ニ是ヲ家行トス、然レハ醫ハ無病タルノ道ナリ。身ヲ療養スルハ醫ノ道有、無病ハ則無爲ナリ。無病ト云ハ無爲ニナリ、心神精氣ノ全ヲ云」八丁オエリ。平人氣象論曰、常以不病調二病人一、醫ハ不レ病、故爲病人平息以調レ之爲法、曰平人之常氣禀於胃、胃者平人ノ常氣ナリ。胃ハ穀氣ナリ、胃ノ氣ハ後ノ元氣也。人ハ天地一體ニシテ一氣ナリ。一氣凝滯ナク周身全キ、則ハ平等不二。是無病ニシテ無爲ナリ。是心神精氣全一氣、則平氣ナリ。人無爲ナル時ハ病不レ可レ有、一氣凝滯スル所有カ故ニ、心神氣トモニ病テ萬行ニ無爲ナル事ナク、其口鼻ニ無爲ヲ」八丁ウ知ト云トモ其體ニ太過不及有テ、一得一失ノ憂ヲナス事一氣ノ凝滯ニヨレリ。故ニ其願フ所成就スル事ナク眞ノ無病ニ非ル、故ニ其道モ正シカラス。眼前少々ノ利害ヲミテ一時ノ便宜ヲ計ルハ明君ノ教ニ非ス。其道

ヲ擾(ユヴ)亂シテ大害ナリ。末世ノ人一世々々ニ少ツヽ先明君ノ行ヒヲ變シテ一已（己）ノ好ミニ合スル事多。タトエハ吾人ノ家ノ内ニ住居スルカ如ニ氣ナリニヲサムル、故ニ水ツキノ所ハ早ク腐リテ蟲抔ヲ生シ、日當リ」九丁オノ所ハ乾テウルヲイヲ失ヒ、其家ノ崩ルモトイトナルカ如ク、崩レナリニ柱ナトヲカイテ置ク。亦人ノ體モ其如ク自ラ疝氣アレハ疝氣ハ不レ治ルナトヽ云テ、其侭ヲク、其上疝ニハ鍼ハ惡シナト云テ、或ハ食事等モ自ラスク所ノ物ヲ用ヒサセ、自ラ不レ好所ノ物ハ人ニモ惡シト云テ用ヒサセス。何ニテモ其偏ニヨル所アル心皆氣ノ凝滯ニヨル者ナリ。シカレハ醫ハ人ノ生命ヲアツカリ補佐スルノ道ナレハ、唯自ラ病ナキヤウニ無病ナルカ、是則無爲」九丁ウナリ。外ニ求ル事ナク、唯自身ノ無爲ノ道ヲ知リ、其ヲモムキニテ人ノ病ヲ療ル也。經曰、不レ可レ治ト云ハ、其論ニ至ラサルナリトアリ、醫ハ意ナリト、意ノ道ナリ。別シテ鍼療ナトハ、眞釵勝負ト同シ事ナレハ、平生其心得ニテ修行スル時ハ、一切眞實ニシテ、信ト心ヲ得テ無爲ノ行トナリ、其道ヲ行フ時ハ危カラス。唯信心ンヲ以修行スレハ眞理ニ至ルナリ。

本文十丁

［問答１６］

問曰、當流鍼道ハ唯信心ンニ非レバ得ル事不レ叶。其信心ント云ハ別ニ可二心得一」一〇丁オ事アランヤ。答曰、鍼ハ無心ナリ。唯自ラノ信心ンヲ工夫シテ修ルヨリ外ナシ、其信心ント云ハ無心ノ機ヲ修ルニ自ラ病ノナキヤウニ修行スヘキノ道ナリ。何レノ道ニテモ心實ナクテハ得ル事カタシ。其志スノ道ニ一心不亂ニ修行スルナリ。先修行ト云ハ自己何モ知ラヌ者ト心得テ、タトエ知ル事ニテモ其知ル事ハ皆自心ノ病ヲ治ル事ト心得テ修行スヘシ。一切ノ法モ其如シ。自心ノ病ヲ療スルノ外、他ノ事ナシ。鍼ノ方別シテ他ヲ治セントスルニ、先自己ヲ治スル法」一〇丁ウヲ修行シテ、他ヲ治スル事自他一成カ如シ。湯藥ノ道ニテモ其理ノカワル事ナシ。少シ學テ名人ニナルノ法有事ナシ。人ヲ治スル者ハ唯信心ンニヨラスト云事ナシ。醫ハ大道ニシテ數術ト分レテ、其行フ所カハリアリト云ヘトモ、止ル所ハ意ノ無爲ニヨル。別シテ鍼ノ道ハ一氣凝滯ヲ診テ氣ヲ平ニスルヲ以大意トス。一氣平等ナレハ心神トモニ平等ナルカ故ニ、鍼意ハ一氣平ニ成ヲ修行シテ、其家行ヲツトムル、故ニ上エハ氣ヲ平ニスト有。イツレノ道ニテモ」一一丁オ氣ヲ平ニスルヨリ外ハアルヘカラス。故ニ別シテ鍼ヲ行トスル者ハ、機道ヲ不レ知其氣ヲ平ニスル事ヲ知ラン。故ニ經曰、人身ノ病ハ氣ノ平不平ニヨルトアレハ、無爲ノ道ヲ知ルヨリ外アルヘカラス。

本文十一丁

［問答１７］

問曰、醫ノ道ハ大道ニシテ平不平ニヨル。其平不平ヲ修行スルニ淺深有ト云トモ其道ヲ知事イカニ。答曰、機之道ハ其氣ヲ知ニ有。鍼ハ無心ナリ。鍼無心ナレハ、意モ亦無心ナリ。意無心ノ機ヲシラサル時ハ、鍼ノ道トハ云カタシ。道ハ其始ニ走リテ」一一丁ゥ其行ヲ行フ、何ノ道ニテモ先ツ體ヲ修メ信心ンヲ以行トスレ之ヲ。信心ト云ハ無心ノ心ヲ云ナリ。意ハ其體ノ理ヲ知テ事ヲ行フ、故ニ質明ニシテ始テ事ヲ行フト云ヘリ。何ホトロニ明ニ言トモ修行セサレハ、口計ニテ信心ンヲ得サレハ、用ニハ立カタク、氣凝滯シテ不レ苦ト云事ナシ。信心ンヲ以事ヲ行フ時ハ其苦ム所ナシ。信心ンヲ以スル時ハ七情ニ應スルト云トモ不レ染不レ汚カ故ニ、アトニテ苦ムノ病ナシ。其信心ンヲ以萬行修習スルニ、不レ至ト云事ナシ。其信心ン」一二丁オト云ハ、一身一氣ナルヲ能知リ、周身一セイニナルヲ云也。周身一セイニ成ル時ハ、平等不二ニシテ天地トモ一體成事ヲ知ル。先天ノ一氣、全シ。是ヲ平ト云ナリ。故ニ胃ノ氣ハ穀氣也。穀氣、則後天ノ元氣ナレハ、先天ノ氣ヲ養テ、心神氣全シ。故胃ハ常氣トハ云ナリ。唯道ヲ貴テ、穀氣ヲ次ニシテ、萬事ニ心カクル則ハ信心ンヲ得ル事疑ヒナシ。諸ノ道ヲ修行シテ無爲ノ道ヲシラントセハ、他事ナリ。氣ヲ修シ、信心ヲ修シ、無心ノ」一二丁ゥ機ヲ第一トシテ、一精出シテ可守事、肝要也。其志シサエ得ル時ハ、無病無爲ヲ得ル者也。志アツテ得サルハ一氣ノ凝滯スル故也。其志ナキハ猶亦、是凝滯シテ其志ヲ得サルナリ。諸道ヲ學テ其志ノ道ヲ、不レ得人不レ可レ有、自ラ一氣成事、見屆テ全フスヘシ。實ニ一氣ナル體トナル時ハ、其氣止ム事ナクシテ、一心ニ修行スル時ハ、其道自ラ全シ。一氣凝滯シ其道見屆ケサル時ハ、其氣止テ全體ノ發スルホトナル信心ンハ、得カタシ。」一三丁オ

本文十三丁

［問答１８］

問曰、全體ノ信心ンヲ得ル時ハ、無病無爲ニシテ諸道修習シテ得サル事ナシ。其無病無爲、其無心ノ機ヲ得ル理ヲ知ル事イカニ。答曰、タトエハ諸道六藝遊藝ヲ修習スルニモ、無心ノ機ヲ以修行スル時、其氣凝滯ナク無病ニシテ修行スル、則其道不得云事ナシ。無心ノ機ヲ不知シテ修行スル時ハ、其心意クシケテ、心神精氣自凝滯シテ病トナリテ、其働ノ爲ニ病ヲ生シテ、皆半ニシテ面白カラスナトヽ云テ、或ハ其師流ノアキシナト云」一三丁ゥテ去ル。是皆師流ノアシキシニアラス、一氣凝滯シテ其働ノツタナキヲ生スルハ、皆心神精ノ一氣凝滯シテ病ヲ生ル故ナリ。古ヨリツタハルノ道ニ無爲ニシテ保養ノ道ニ非ル事ナシ。行動シテ不二凝滯一ノ機工夫シテ、自他トモニ無病無爲ノ道ヲ知ル時ハ、其機則人身ノ行動凝滯ナキノ理ヲ知テ、醫行ハ意ノ行ナレハ其理ヲシラサル、則一氣凝滯ノ理シル事ナクシテ、機道ノ奥義ヲ知事カタシ。

本文十四丁

［問答１９］

問曰、六藝等ノ行動シテ、一氣凝滯」一四丁オナキヤウニスルノ理ヲ知ニハ、其諸道習テ其理ヲ知ルカ、亦不學シテ先知ノ理アリヤ。答曰、愚ハ何モ學テ不知ト云トモ、知ル所ノ理ハ人身ノ行動、八法ニ行動スルト云トモ其體心神精ノ凝滯スル事ナキノ理ヲ知テ、是ヲ機道トナツク。自ラ周身無凝滯ノ理ニシテ、心神精氣ヲ全スルノ理ナリ。其理鍼道修行ノ内ヨリ考タル者ナレハ、鍼道機道ト名付テ、兩用俱ニ心神精氣ヲ全スルノ理ヲ以、平生流[33]ト名付ク。是平カニ生ルト云ノ義ナリ。其理、」一四丁ウ皆古書ニヨリトコロ有リト云トモ、其言論廣ケレハ是ヲ略ス。唯一氣ノ平生トナルノ理ヲ考、自得シタル故、其效アルヲ以一流ノ奥義トス。故狐疑スル者ハ其效ナシ。狐疑スル者ハ、一流ヲ得事カタシ。無二狐疑一信心ンヲ以無心ノ機ヲ得ル時ハ、八法ノ働ノ理ヲ知ル事疑ナシ。

本文十五丁

［問答２０］

問曰、其信心ヲ以無心ノ機ヲ得ニ、其修行ノ體イカニ。答曰、信心ン、則無心ノ機ナリ。無心ノ機ヲ得ト云ハ、先ツロヲ、〇圓ク明テ見ニ、是則無心也。」一五丁オ無色無形也。此無心ノ理ヲ知ニハ先ロヲ圓ニシテ見ルニ、言モナク、思事モナク、目ヲ閉テ見レハ、人モナク、我モナク、思フ事モナク、七情ノ發ル事モナク、是無心ナリ。呼吸ノ出ニ非、入ニ非ルノ所也。無我無心ナリ。是則名トスヘキモノナシ。是老子曰、無名ハ天地ノ初、有名ハ萬物ノ始トアルニ、推按ルニ息ノ呼吸ハ、則呼息ハ陽ナリ、吸息ハ陰ナリ、呼息ハ出ノ息也。出ノ息ヲ止ルハ吽ナリ。入ノ息ヲ止ルハ阿也。呼吸本一氣ナレハ、阿吽モ又一氣成ト云トモ、ロヲ閉テハ内ニ七情悉」一五丁ウク發テ、氣ヲシツムルニ、何ホト靜ニスルトモ、氣ノ無凝滯一身平等ニ氣ヲ充ル事成カタシ。其七情萬機ニカマワス修行スル時ハ、其氣凝滯シテ多ハ病トナル、故ニ色々ノ氣發テ、息ヲ周身ニ全クヲサムル事成カタシ。故□（ニ）初ニロヲ圓ク明テ無心ノ理ヲ知テ、呼吸ノ間ヲ以無心機ト云也。ロヲ〇、如是スルニ呼吸納ル所、是陰陽自然ト和合ノ一氣ニシテ他物ナシ。如此シテ周身エ氣ヲ充ル時ハ、無心ノ一氣也。是ヲ無心ノ機ト云。則心神精氣自ノ一」一六丁オ氣ナリ。

本文十六丁

［問答２１］

問曰、ロヲ圓ニシテ周身ニ氣ヲ充事成カタシ。イカヽ致ヘキヤ。答曰、ロヲ圓ニナス時ニ、言語ナキハ無心也。出ル息ハロヲ圓ニシテ吽トハ言カタシ。入ル息ノ阿ハ圓ニシテモ云安シ。故ニロヲ開テ阿ヲ以、阿々々々々ト聲ヲ出サズ、氣ヲ充、臍下氣海丹田ヨリ周身ニ充ル事ヲ得ル。入ルノ息ニシタカイ、阿くくくくト長ク充レハ、出ル息

[33] 「平生流」、原文ママ。「平常流」ではない。

入ル息一氣ト成テ、周身ニ充ル事ウタカヒナシ。呼吸周身ニ充ル時ハ、周身ニ凝滯シタルノ」一六丁ウノ心氣精氣、其呼吸息ニシタカイ一身ニ充、此ㇾ時此ㇾ時臍下氣海丹田ニ氣ヲ充時ハ、自氣納リテ、心神精氣ヲ安ク保養シテ、萬行修習ニ無心ノ機ヲ物ニ不ㇾ染不疑ノ氣ヲ知ル。氣海丹田ニ氣ヲ充タシムル時ハ周身エ悉ク充ルノ氣ヲ知ルヘシ。」一七丁オ

本文十七丁

［問答２２］

問曰、臍下氣海丹田エ氣ヲ充シムルノ義ハ、其法多シテ、其論モ區也。何如可心得ヤ。答曰、世ニ臍下丹田ニ氣ヲ納充ノ法多クシテ其論多。初心ノ人其志有リト云トモ其臍下ニ氣ヲ充事、甚成カタキ。人其内ニ退屈シテ、半ニシテ止事多シ、タマくノ丹田充ル事有ト云トモ、凝滯シテ周身エ充シムル事不能。其氣ノ凝滯シテ周身エ充事不知、故多年精根ノ盡シテ、丹田ノ氣丈夫ノ樣ナレトモ、ヤヽモスレハ氣ヌケテ失フカ如ク。故ニ常々心カケテ大事ノ者ノ置所ヲワスレサル樣」一七丁ウニシテ、一切氣ノ休ム間ナク却テ氣凝滯ヲナス、然トモ座シテ腹ヲ張リ、行動ニモ臍下エ氣ヲ充ルヤウニ腹ヲ張出ト云トモ、臍下ニ凝滯シテ下エメクリ薄ケレハ、下枯レテ、周身全キ事ヲ失フ事多シ。故ニ門人ノ問ニ任セテ答ヲ誌スト云トモ、愚等カ云ハトテ世ニ用ノ徳ナケレハ、ホンノイラヌ世話ト思フ故名付ク。

本文十八丁

［問答２３］

門人問曰、諸道トモニ氣ヲ丹田ニ納ル事、專一トス。何故ニ丹田ニ氣ヲ納テ、益有テ貴トスルヤ。答曰、臍下氣海丹田ハ腎間ノ動氣也。是則生根也。」一八丁オ十二經ノ根本、五臟六腑ノ本、一名守邪ノ神ト云、是三焦ノ本、周身ノ動キ、皆此ノ一氣ニヨラサル事ナシ。故ニ丹田ノ一氣ヲ守テ、其益多クシテ貴トス。

［問答２４］

問曰、其丹田ヲ充ニ全キ、即效之法有テ、得安ヤ。答曰、愚カ授ルノ方、全シテ即效有リ。是則先師ノ法ニシテ、愚按シ數年來工夫シテ、機ヲ調、人ニ傳テ久ク、難治ノ病等ヲ退テ、其效全如神。其法多念ナク、氣ヲ充ル時ハ、一二月ノ間ニ諸病退ト云トモ、其修ル精氣ノ充ニ種々ノ法アリ。」一八丁ウ

本文十九丁

［問答２５］

問曰、多念ナク子（ネ）ル事、前□（段）ニ云如スルニ、思フヤウニ充サル時ハ、何如スヘキヤ。答曰、萬法ニ萬機發リテ物ノサヽワリトナル。人ニテモ先獨立テ、ロヲ

隨分圓ク明テ見ルニ、前ニ云無心ナリ。ツヨク圓ニスル時ハ、何ホト多機ノヲコル人ニテモ、一物發ル事ナク無」一九丁オ心也。ロヲ圓ニ明ク時ハ阿ノ聲ヨリ外ニ出ルモノナク、入ルモノモ無シ。其阿ヲ阿々くくくト云テ、其聲ノ不〻レ高ヤウニ、阿々ト内エ充ル也。初テハ隨分ソロくト充テ、次第くニ阿々くくくくくくト聲ノツヽクホト、内エ充テ、其上息ツカヒシケクナラハ、齒ヲ、六七度タ々キテ、津ヲ生ルヲ呑テ、氣ヲシツメ、亦ロヲ圓クシテ、阿々くくくトハル時ハ、一二月ニシテ多機シリソキ、甚機安ク成事、疑ナシ。

［問答２６］
問曰、人思事多ク、何ノヤクニタヽヌ事」一九丁ウニテモ、風（フ）ト思付事、ソレカ苦ニ成テ、不〻レ止モ、前ノ如クスルニ宜ヤ。答曰、古哥ニ曰、思ハシト思フモ、モノヲ思フナリ、思シ、トタニ思ハシヤ。唯ト唯ノ字ノ如ニテ知ヘシ。唯無心ノ機ヲ以、萬行ヲナスヨリ外、不可□（有）。ロヲ圓ク明時、タヽノ義理ニ合フ也。立テ隨分ロヲ圓ク明テ、阿々くくくト氣ヲハリ、腹エ充ル時ハ、益ニタタヌ事ハ思ヌヤウニナル也。

本文二十丁
［問答２７］
問曰、男女共ニ、右ノ如ク充ル時ハ宜ヤ。答曰、男女トモニ惣躰ロリ（ノ）回リ、」二〇丁オ氣ノメクリニ依テ、氣ノ強弱アル者也。故ニ吉凶ノ文字ヲ授（按）ルニ、孔子曰、一ヲ推シテ十ト成シ士ト云トアリ。故ニロノ回リノ氣ノメクリ惡キハ凶也。ロノ上ニ士ヲ書テ吉トヨム。此ノ理上ケテ、カソエ難シ、是ヲ略ス。ロノ回リノ能ク氣ノ順ルヲ、ヨシトス。順惡キハ氣弱シテ、志意不レ和者ナリ。

［問答２８］
問曰、ロヲ圓ク明ク時ハ、無心也。如是計ニテ、修方外ニイラサルヤ。答曰、他念ナク前ノ修法ノ如ク、氣ヲ充ル時ハ、百病悉ク退テ、萬行ノ用ヲ」二〇丁ウナス事モ足レリト云トモ、當時病アル人ハ前ノ法ノ如クシタル上ニテ、療スルノ術數多有。初テ修ルノ人ニテモ、亦數年調氣ノ道、心カケタル人ニテモ、周身一氣ノ平不平ヲ知事、第一也。

本文二十一丁
［問答２９］
問曰、周身ノ氣、平不平ヲ知ルトハ、イカヽ成ヤ。答曰、人ノ行動、不自由ナルハ一氣ノ平不平ニヨル。人皆一氣凝滯シテ、平不平ニヨリテ、病ヲ生ス。其凝滯ヲ知テ氣ヲ和ス。氣ノ凝滯ハ、タトエハ水ノ氷リタルカ如ク、温氣ヲ」二一丁オ以解ル。其ノ温氣ヲ以、其凝滯ヲ解ニ八法九道ノ法アリ。

［問答３０］

問曰、其八法九道ノ法ハ、何如、可心得。答曰、前ノ如、ロノ周リヲ、 如是九品ニ分テ、九宮ニ形トリ、八卦ノ數ヲ以、脈ノ凝滯ノ形ヲ診テ、其變ニ應シテ、六拾四變ヲ分テ、歳月日時ニ應ス。是ハ至テムツカシキ故、略レ之。其八法之理ハ、鍼灸大全八法ノ奥旨ヲ得テ、此ノ八法ノ法ヲ挼（按）シテ診ミテ、是ヲ法トス。診ミノ術無レハ疑ノアラン事ヲ思テ、診ムルノ術ヲ附テ」二一丁ウ其意ヲアラハス。

本文二十二丁

［問答３１］

問曰、先其八法ヲ診ムル法、何如。答曰、先診ルニハ、細キ竹ノ二寸計ナル管ヲ以、ロノ八法ヲ氣ヲツヨリ（ク）ツメテソロくト吹クヘシ。診ノ法ハ左ニ誌ス。

【図０２】【図０３】

図 02

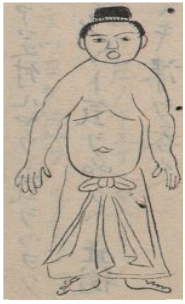


図 03

（０１）

一ノ氣ハ、丹田エ氣ヲ充ルニハ、先ツ立テ、ロヲ圓ニ明テ阿々くトハル。

其後管ヲロニクハエロノ下エ如圖成ヤウニ、」二二丁オ隨分下アコエ付ルヤウニ、氣ヲツヨクツメテ、ソロくト、氣ヲ吹クヘシ。其後齒ヲタヽキ津ヲ呑ムヘシ。

【図０４】

図 04

（０２）
二ノ氣ハ、其後管ヲ、ロノ左ノ上ノ方エナルヤウニ、氣ヲツメテソロくト氣ヲ吹クヘシ、此ノ如シ氣ヲハリテ、後歯ヲ叩キ津ヲ生シテ呑ヘシ。
【図０５】」二二丁ウ

図 05

本文二十三丁
（０３）
三ノ氣ハ、管ヲ左ノ中央エ、如圖ナルヤウニシテ、氣ヲ充テ、ツヨク息ヲツメ、ソロくト氣ヲ吹クヘシ。前ノ如シ。

【図０６】

図 06

（０４）
四ノ氣ハ、管ヲ左ノ下エナルヤウニシテ、氣ヲ充テ、ツヨク氣ヲハリテ、ソロくト氣ヲ吹クヘシ。圖ハ左ニ誌ス。」二三丁オ
四ノ気【図０７】

図 07

（０５）
五ノ氣ハ、右ノ中央エ、如圖氣ヲ充テ、ツヨク氣ヲツメ、ソロくト氣ヲ吹ヘシ。

【図０８】」二三丁ウ

図 08

本文二十四丁

（０６）

六ノ氣ハ、右ノ下ノ方エ、如圖ナルヤウニシテ、氣ヲツヨクツメテ、氣ヲ吹ヘシ。

【図０９】

図 09

（０７）

七ノ氣ハ、右ノ上エ、如圖上エ成ヤウニシテ、氣ヲ充チ、ツヨク氣ヲツメテ、ソロくト氣ヲ吹ヘシ。

【図１０】」二四丁オ

図 10

（０８）

八ノ氣ハ、中央上エ如圖、上エナルヤウニシテ、氣ヲ充チ、氣ヲツヨクハリテ、氣ヲソロくト吹クヘシ。

【図１１】

図 11

右八法ノ氣、則一氣ニ丹田ヲ本トシテ、周身ノ平等ヲナス、順々ニ氣ヲ充テ、氣ヲ吹ヘシ。何レノ氣ニモ、先ツロヲ丸ク形ヲ能圓ニシテ、阿々くくくト、氣ヲ充テ、此八法ヲ一氣々ニ阿ヲハリ、充ル事、一二ヶ月ホトニシテ、腹内和」二四丁ウ合テ至テ、心ヨリ食ヲスヽメテ、妙ナリ。
八法、一二三四五六七八ト數ヲ以、氣ト名付ク。病アル者ハ、其相氣ヲシルス。如此修ル内ニハ、自ラヲホエテ工夫出來ル故、有増ヲ誌ス。能々考合スヘシ。

本文二十五丁
［問答３２］
問曰、其凝滯ノ淺深ハ、何如知ルヘキヤ。答曰、凝滯ノ淺深ハ、其病和スルヲ以、度トス。前云如、ロヲ圓ニシテ氣ヲハル時ハ、無心也。其無心ノ氣ヲ、阿ヲ以、修シ納ル時ハ、陰陽ノ氣和合シテ、周身一マイニ充テ、手心足心平滿シテ、周身平等、周身肌目アシキモ津」二五丁オヲ生シ、或ハタヽミタマ石フミ、タムシノ類、痔脱肛陰分エ出ル病、肌肉ニアル病モ、不殘治ス。打身、クシキ古病、凝滯スル者、其コリタル所痛ミ出ス事アリト云トモ、猶一精ニ張テ氣ヲ充ル時ハ、自然ニ解テ治スル。故ニ筋骨ノ久シク凝アル抔モ、皆々基本ニ復シテ治ス。氣ノセハシキモ、靜ニナリ、氣丈夫ニナル事ウタカイナシ。心神氣全シテ、物ノ苦ニナル事、不殘治ス。八法ノ氣ノ病ヲ治ルノ妙ハ、上ケテ數フヘカラスト云トモ、其少ヲ誌ス。」二五丁ウ

本文二十六丁
（０１）一、頭痛ニハ七氣ノ法ヲ以、氣ヲ充テ可也。

（０２）一、左ノ足痛ニハ、右ノ六ノ氣ノ法ヲ以、氣ヲ吹テ痛所ヲサリテヨシ。

（０３）一、右ノ足痛ニハ、左ノ四氣ノ法ニテ、氣ヲ充テヨシ。

（０４）一、左ノ肩痛ニハ、右ノ五氣ノ法ニテ、氣ヲ吹テ充テヨシ。

（０５）一、右ノ肩痛ニハ、左ノ四氣ノ法ニテ、吉シ。

（０６）一、偏頭痛ニハ、左ノ二氣ノ法ニテ、氣ヲ充テヨシ。偏頭痛ハ左右トモ可也。」二六丁オ

（０７）一、風熱強頭痛スルニハ、右ノ五氣ノ法ニテ、氣ヲ吹テ可也。

（０８）一、右手痛ニハ、三ノ氣法ニテ、氣ヲ充テ吉。

（０９）一、淋病ニハ、一ノ氣ノ法ニテ、氣ヲ吹テ吉。

（１０）一、小便チカク難義スルニハ、一ノ氣ノ法ヲ以、氣ヲ充テヨシ。

（１１）一、胸ノ痛ニハ、三ノ氣ノ法ヲ以、氣ヲ充、吹テ吉シ。四氣ノ法ヲ、次ニシテ可也。

（１２）一、腹痛ニハ、一二三四ノ氣ヲ、充テ氣ヲ吹ヘシ。

（１３）一、背痛ニハ、三五ノ氣ヲ、充テ氣ヲ」二六丁ウ吹ヘシ。

本文二十七丁

（１４）一、八法氣ヲ、前ニ誌ス如ク、次第々ニ、氣ヲ充シムル時ハ、周身氣全クミツル。

ロヲ圓ク明テ、無心ノ氣ヲ、其マヽソロくト、ロヲ一文字ニシテ、齒ヲ合テ、舌ヲ上ハクキエ付テ、氣ヲ納ル、是ヲ平氣ト名ク。ロヲ圓ル明ニシテ、阿々くくくト氣ヲ周身ニ充シメテ、齒ヲタヽキテ、液ヲ生シ、呑テ、平氣ニシテ、氣ヲ納テ、又氣ヲ充ル。愚カ多年修ルカヲ以腹エ氣ヲ吽ト」二七丁オ充シメ、或阿吽ノ氣ヲ、兩ナカラ用テ、氣ヲ充、或靜座シテ氣ヲ充シテ、或行動シテ氣ヲ充シムルニ、心氣ノ止所有リ、偏ヨル所有テ、中々周身ニ充ヲヽセル事成カタク、唯氣閉スル計ニテハ、周身エ充ノ效甚薄シ。靜ニシテ氣ヲ納ルニ、中々前々ノ凝滯ノ解ル事ナク、却テ氣ヲコラシテ、疝積抔ヲ生シ、或ハ逆上シテ、下冷痔瘡ナト生スル事有リ。色々ノ病ヲ生スル故、トカク或ハ至言ナトヲロニ誦シ、靜ニ氣ヲ納ト云トモ、トカク」二七丁ウ氣ノ凝滯スル事マスくト盛也。故ニ工夫シテトカク無心ノ所ヨリ、氣ヲ修シ得ント授（按）シテ、如此一法ヲ工夫シ出シ此一理、至テ妙用ニシテ、人ニ傳テ修サシムルニ至テ妙アリ。

本文二十八丁

［問答３３］

問曰、八法エ、氣ヲ充チ、諸病ヲ治スルノ理ハ、脈ノ八法六十四ノ變ニヨリ、千變萬化ノ方ハ、其理ムツカシウシテ、其修行ニヨリ其變ヲ得ルト云トモ大カイハ何如。答曰、脈ハ本艸脈學奇經ノ時珍カ圖シタル九道ニ依テ診得タリ。九道中央心主ナリ。」二八丁オ是、心主ハ則チ手厥陰心胞經ナリ。故、何レノ道ニモ心法ハ手心ノ中央勞宮ノ穴ヲ

以、第一ト診フ。是心主ノ診也。故、勞シタル者、手心ニ熱ヲ生スル事、是ニテ知ヘシ。愚按（按）ニハ、手心勞宮ト、少府ト、充ルヲ全トス。是、心ハ腎經湧泉也。手ノ大指、次指ヲ、凝滞サセヌヤウニスル時ハ、自ラ周身ニ氣ヲ充。

本文二十九丁

［問答３４］

問曰、手ノ大指、次指ハ何如ナル故ニ、第一ニ氣ヲ付ルヤ。答曰、手ノ大指ハ、手ノ太陰肺經ナリ。手ノ次指ハ、手ノ陽明大腸」二八丁ウ經ナリ。肺大腸トモニ金氣也。肺ハ氣ヲ主ル。故、氣ハ米ニ気（モトムト）書也。米ハ、則穀氣ニシテ、前ニ言ル如ク、胃ヨリ受ルユエ、胃ハ常氣也トアリ、穀氣ヲ胃ヨリウケ肺經ニ、寅ノ時、明七ツニ胃ヨリウクル。故ニ寅ノ時、調氣スルノ法數多アリ。是ニテ可考數多ナレハ、此ニ略ス。其理考合スト云トモ、愚流ニハ不用トモ可也。肺大腸ハ表裏ナレハ、大指次指ハ不凝ヤウニスルカヨシ。手ノ大指ハ肺金ニシテ、金生水ト、腎精ヲ生ル故也。房事ヲ何ホト愼ム」二九丁オトモ、金氣カコリテハ、相生ヲ失フ故、精氣ノ充ト云フ事ナシ。周身ノ津液モヌケル也、故ニ修行スルホト凝滞ヲマス、故心神精モ偏氣トナツテ、自ラ靜ニ納ル者ホトツカレテ、正理ヲウル者スクナシ。故ニ何ノ道ニモ、手ノ大指次指ハ、セハカアルホトニ、氣ヲ付テ、考テ可也。別シテ鍼術ナトハ、此ニ指第一ナレハ、其用心ナクテハ不成ルナリ。凝時ハ氣不充故、氣ヌケ鍼ナリ。自心ニ凝滞シテハ、一氣平等ナル所ハ得ラレヌナリ。能々可考ナリ。」二九丁ウ

本文三十丁

［問答３５］

問曰、八法ノ氣ヲ以管ニテ、氣ヲ充、其凝滞ヲ解ノ理有ヤ。答曰、前ニ言フ如ク、管ノミト心得テハ、其意得難シ。此理ヲ按（按）ル事、多歳ニシテ自得シタリ。呼吸ハ陰陽也。口ヲ強ク閉ル吽ナリ。ソレニ管ヲアテヽ少ツヽ氣ヲ吹ハ、是阿ナリ。阿吽是陰陽也。出ニ非、入ニ非ノ一氣也。此ノ一機、周身八方凝滞ナク、充シムル時ハ、周身自然ノ一機ニシテ、妙要ノ信心ンヲ得〻事、疑ナシ。自ラ十方凝滞ノ氣解テ、平等トナル。是氣ヲ平ニスルノ一」三〇丁オ理也。故九道ノ脈、奇經八脈、十二經、十五絡、二十七氣ノ理ヲ考合テ、一流ト名付テ、平生流ノ機療ト云フ。此道、則機道也。陰陽ハ名有テ形ナシ、理ヲ以知、管ニテ吹ノ理、尺八、セウ、シチリキ、ヲウテキ、ホラ貝、横笛等ニ、至ルマテ、心ヲ付テ、可考。一切口ニテ吹ク嗚モノ等、一切コエツカイ等ノ理ヲ知ルカヨシ。

［問答３６］

問曰、醫ハ家行ナレハ、自ラ先、療用ノ多キヲ皆第一トス。當流ニハ、夫ヲ不好ヤ否ヤ。答曰、不好ト云」三〇丁ウフニハ非。醫ハ仁術也。仁アレハ義アリ。禮ヲ知レハ、智

信自ラ具ス。是五常ハ其常ナレハ、唯信ト心ニ修行スレハ、自ラ其道モ立、其理モ全シ。愚ハ鍼ヲ家行トスレハ、唯其道ヲ貴テ、鍼ヲ以諸道ノ理ヲ知ル。是氣ノ方也。機ノ道也。諸病ハ氣ノ平不平ニヨルト云リ。百病ハ氣ヨリ生ルナリ。其氣ノ全道ヲ知ル、是心ト信ナリ。信ト心ヲ以萬行修習ノ道ヲ知ル時ハ、諸道之理ヲ知ル事疑ナシ。能々思惟スヘシ。故ニ經ニ曰ク㆓拘〻於鬼」三一丁オ神㆒者、不レ可㆓與言㆒至徳㆒、惡㆓於鍼石㆒者、不可與言至巧。鍼灸大全ニモ有、ムカシカラ惡ミタリトシレハ、今更ノ事ニ非。鍼術スルハ唯其道ヲ貴、修行シテ鍼ヲ惡ム者ハ、愚カ療用スル所ニ非ル事ヲ知。善シ惡シヲ思ヒテハ、妙效ハ得難シ。鍼ヲセ子（ネ）ハ云譯ハナシ。用ハ鍼ノ用ナレハ、信用ナケレハ、其用ナシ。愚流、信心ンヲ以鍼スル外、別ニ鍼スル仕形色々ナシ。故ニ用ラレヌトテ、サシテ今初テ憂モナシ。信用ノ人ニノ」三一丁ウミ、信心ンヲツクシテ、療スルナリ。

本文三十二丁

［問答３７］

問曰、諸藝ニ用ユヘキ、氣ハイカヽ心得ヘキヤ。答曰、諸藝修行ノ行動ニ、可用ノ機ノ用、十三法有テ、其法ヲ用テ修行スル時ハ、氣ノ凝滯ナク、萬行修習ノ機也。五行ニ、五氣八法ノ八機トトモニ、十三氣ナリ。法ハ外ニ誌ス。前ノ平氣ノ變ニシテ、十三機至テ妙ナリ。

［問答３８］

問曰、諸藝術ニヲイテ、保養ノ道ニ成ル意、イカヽ。答曰、諸藝術ノ皆ソレくニ、カケ聲等有**ヤア**ト。」三二丁オカクルハ、**ヤ**ハ、陽ヲ充ル。**ア**ハ陰ヲ充ル。兩手ニ扱者ハ、**ヤ**ハ右ニ納リ、**ア**ハ左ニ納ル。是陰陽ノ聲也。右ノ手ニテ、スル事ニハ、吽ト聲ヲカケテ可也。**ヤ**ハ吽也。左ノ手ニテ、スルニハ、阿トカケテ可也。左ハ陽也。故男ハ、左ヲ主ル。男子ハ陽ヲ主ルユエ、其陰ヲトエロエヤスシ。阿ヲ充テ、陰氣盛ナルハ、内能納ル。是陰陽和合也。女子ハ陰ヲ主ル。阿ヲ充ル時ハ氣分盛ニ、男女同一氣トナル時ハ、心神精自安シ。

［問答３９］

問曰、阿、陰トキコエタレハ男女ノ分」三二丁ウテ有ヘキニ、男女トモニ用ル意、イカヽ。答曰、前ノカケ聲ナトハ、表ニ其陰陽ヲアラワス。**ヤ**ハ、陽、**ア**ハ陰ト、知ヘシ。愚カ修ルノ阿ハ、陰陽和合ナリ。是、全阿ヲ修ルニ非、口ヲ圓ク明テ、呼吸陰陽トモニ内ニ納メ充、故ニ陰陽トモニ全シ、故ニ、阿ハ、陰陽トモニ、氣ノ不平ヲ平ニナラスノ阿ニシテ、陰陽ノカヲリユルノ、阿ニ非。内ヨリ陰陽平等ニナラス時ハ、周身全ク平氣トナル。内、陰陽平等ナルハ、男女共モ、其變リ不〻可有也。内外平等」三三丁オトナル則ハ周身氣全シ。女子ハ氣ヲ充トモ、男子ノヤウニ口ヲ丸クアイテ、シケくセヌ者

ナレハ、唯管ヲ用テ、八法ヲ充サセテ可也。吽ハ發スルノ氣ナリ、阿ハ納ノ氣ナリ。左身ハ、阿ニテ充。右ハ、吽ニテ充ル。左ハ本ナリ、天ナリ。右ハ、標ナリ、地也。阿吽、陰陽也。阿々くくくト云ハ、陰陽和合ノ氣也。

本文三十三丁

［問答４０］

問曰、臍下丹田ニ氣ヲ充ル事、男女トモニカワリ不可有ヤ。答曰、臍下氣海丹田、男子ハ、精ヲカクシ、女子ハ胞ヲカクスト有。是、男女ノ體、」三三丁ウ男ハ陽ヲ主、女ハ陰ヲ主ルト云トモ、陰陽和合ノ一氣ヲ以、周身ニ氣一セイニ充ナリ。臍下丹田ハ、生命ノ本タル事、男女ノカハリ有事ナシ。呼吸、陰陽ヲ充テ、其氣全、口ヲ圓ク明テ呼吸ヲ以内ニ充時ハ、萬病治ル事、疑ナシ。必陰計、陽計、充ノ理ニ非。唯無心ニシテ、陰陽和合ハ、自然ノ體也。時阿吽ノ息ヲ修ルト云トモ、唯一氣無心ノ機ヲ修ルノ道ナリ。是則、萬行修習ノ機ナリ。」三四丁オ

４．「平常流機道問答」の調息

（１）病論

「平常流機道問答」では、病は何に起因すると考えているのだろうか。

［問答０１］の答えに、次のようにある。

「唯、人ハ一氣凝滞依テ病ム。其一氣無凝滞則以息自平也」

（唯人は一気凝滞に依りて病む。其の一気凝滞無くば、則ち息を以て自ら平らかなり）

人が病むのは一気の凝滞にに起因するという。さらに［問答０２］では滑伯仁『難経本義』五十六難[34]を問いに引用し、次のように答える。

「問曰、滑伯仁曰、天下之物理有レ感、有レ傳。感者情也。傳者氣也。有レレハ情斯レ有レ感。有レレハ氣斯レ有レ傳。今夫五臟之積特（タヽチニ）以二氣之所一レ勝傳所不勝云ハ何如。答曰、人物二感ル則ハ自氣ノ凝滞ヲナス。其ノ凝滞ニ依テ七情是ヨリ發シ、又七情ニ依テ氣ヲ凝滞ス。傳ル者トハ陰陽五行凝滞ス。故有(レ)感有(レ)ト傳云フナリ」

（問うて曰く、滑伯仁曰く、天下の物理に感有り、伝有り。感は情なり。伝は気なり。情有れば斯れ感有り。気有れば斯れ伝有り。今夫れ五臟の積、特ちに氣の勝つ所を以て、勝たざる所に伝うると云うは如何。答えて曰く、人物に感ずる則（とき）は自ら気の凝滞をなす。其の凝滞に依りて七情是より発し、又七情に依りて気を凝滞す。伝うる者とは陰陽五行凝滞す。故に感有り伝有りと云うなり）

[34] 「或問、天下之物理有感有傳、感者情也。傳者氣也」、滑寿『難経本義』、吉野屋徳兵衛、天和４（1684）年、早稲田大学図書館蔵、三十七丁ウラ。

感ずる時に凝滞が起こり、その凝滞により七情が起きる。また七情によって凝滞が起きることもあるという。一般的に七情「怒・喜・思・憂・悲・恐・驚」は、内因による病である内傷を、起こす。これに関連する一文が、『黄帝内経素問』挙痛論にある。

「余知、百病生於氣也。怒則氣上、喜則氣緩、悲則氣消、恐則氣下、寒則氣收、炅則氣泄、驚則氣亂、勞則氣耗、思則氣結。九氣不同、何病之生。……思則心有所存、神有所歸、正氣留而不行。故氣結矣」
（余知る、百病は気より生ずること知るなりと。怒れば則ち気上り、喜べば則ち気緩み、悲しめば則ち気消え、恐るれば則ち気下り、寒ければ則ち気収まり、炅（あつ）ければ則ち気泄れ、驚けば則ち気乱れ、労すれば則ち気耗し、思えば則ち気結ぶ。九気同じからず、何の病か之を生ずるや。……思えば則ち心に存する所有りて、神に帰する所有り、正気留りて行らず。故に気結ぼる）

［問答３６］では、「百病ハ氣ヨリ生ルナリ」と、これに依拠する文がある。すべての病は気から起きるというのである。
ではどうすれば、これを解消できるのか。『黄帝内経素問』「至真要大」には

「以所利而行之、調其氣、使其平也」
（利する所を以って之を行らして、其の氣を調え、其れをして平ならしむなり）

とある。「気を調え平らかにする」調気により健全な状態にするのがよいのである。
また『黄帝内経霊枢』「根結篇」には

「上工平氣、中工亂脈、下工絶氣危生」
（上工は気を平らかにし、中工は脈を乱し、下工は気を絶ち生を危くす）

とある。「上手な医者は、気を健全にし、普通の医者は脈を乱し、下手な医者は気を断って生命を危険にする」という。
本書［問答０１］「唯、人は一気凝滞に依りて病む」や［問答１６］「別して鍼の道は一気凝滞を診て気を平にするを以て大意とす」という病論は、これら『黄帝内経』に基づき得られたのであろう。
また、［問答０９］～［問答１５］は、「臍下気海丹田」についての記述である。
［問答０９］では『難経』六十六難をひいて「臍下腎間の動気」が重要であることを述べる。

「六十六ノ難ニ曰、臍下腎間ノ動氣ハ、人ノ生命也。十二經ノ根本ナリ」
（六十六の難に曰く、臍下腎間の動気は、人の生命也。十二経の根本なり）[35]

しかし、［問答２２］では、丹田に気を充たすことは難しく、かえって凝滞し周身に気が充ることができないという。

「世ニ臍下丹田ニ氣ヲ納充ノ法多クシテ其論多。初心ノ人其志有リト云トモ其臍下ニ氣ヲ充事、甚成カタキ。人其内ニ退屈シテ、半ニシテ止事多シ、タマく丹田充ル事有ト云トモ、凝滞シテ周身エ充シムル事不能。其氣ノ凝滞シテ周身エ充事不知、故多年精根ノ盡シテ、丹田ノ氣丈夫ノ樣ナレトモ、ヤヽモスレハ氣ヌケテ失フカ如ク」
（世に臍下丹田に気を納め充つるの法は多くして其論多し。初心の人は其志有りと云えど其の臍下に気を充つる事、甚だ成りがたき。人其の内に退屈して、半ばにして止める事多し、たまたま丹田に充る事有りと云ども、凝滞して周身へ充たしむる事能わず。其の気の凝滞して周身へ充つる事知らず、故に多年の精根の尽して、丹田の気丈夫の様なれども、ややもすれは気ぬけて失うが如く）

白隠『夜船閑話』では「長がく両脚を展べ、強よく踏みそろへ、一身の元氣をして臍輪、氣海、丹田、腰脚、足心の間に充たしめ」[36]として、気海丹田に気を充たす方法を一番にして、気海丹田を最重要視する。本書でも、腎間動悸は大事なものであるとは認めている。しかし臍下気海丹田に気を充実させることよりも、周身（全身）に気を充たす事の方をいうのは、『夜船閑話』などとは異なっているように思える。

（２）調気法・調息法

「調気法」という語は、唐、孫思邈『備急千金要方』[37]「養生」に「按摩法」や「服食法」「調気法第五」として項目が立てられている。ここには、他に「按摩法」や「服食法」の記載もあり養生法の一つである。また明、朱棣『普済方』[38]「服餌門」「養性法」に「服氣法」や「絶穀行気法」といった「気」に関する養生法がみえる。

つぎに「調息法」はどうか。「調息と云う言葉は、『卍庵仮名法語』に「……、止観調息は、座禅の要衡なり」「気は丹田腰脚等に充塞せしめよ」「調息の法は坐定の後、心氣を氣海丹田に養ひ臍輪より逆上せしめず、鼻孔より息を通じ、……」[39]とみえる。調息法に関し

---

[35] 『難経本義』「六十六難」に「臍下腎間動氣、人之生命也。十二經之根本也」
[36] 白隠慧鶴原著、芳澤勝弘訳註『夜船閑話』白隠禅師法語全集 4、禅文化研究所、2000 年、p. 84。
[37] 『千金要方』曹柄章 編『中国医学大成続集 11』、上海科学技術出版社、2000 年。
[38] 『普済方』、景印文淵閣四庫全書、第 747-761 冊、驪江出版社、1988 年。
[39] 「卍庵仮名法語」、禅宗編纂局編『禅門法語全集』第八篇、貝葉書院、1896 年、pp. 8-9。「卍庵仮名法語」は十八世紀頃の書か？

て鎌田『気の伝統』は、「中国の調息法と、仏教の経典や『天台小止観』などに説かれている調息法とが融合して、日本文化の伝統の中で気の系譜として連綿と継承されている」「瑩山、沢庵、白隠などの仏教者をはじめとして、貝原益軒、平田篤胤、平野重誠、佐藤一斎など多くの人々によって主張されてきた」「日本文化の精髄といわれる能や茶道をはじめとして、武道や芸道においては、この調息法が重要な役割を演じた」「丹田呼吸ができなければ、武道や芸道の奥技を極めることはできない」[40]という。さらに「仏教においては、気についてはほとんど説かれることはない」「気という言葉はあくまでも中国思想の言葉なのである」「仏教では気のかわりに『息』という言葉を用いる。息とは呼吸のことである」[41]という。鎌田は「調気法」と「調息法」は同一であると見なしているようである。いずれにしても「呼吸法」であることには、ちがいないだろう。

ところで本書『平常流機道問答』では「調気」と言う語は、四回使われているが「調息」は見あたらない。

では本書の調気法とはどの様なものなのだろうか。

冒頭、［問答０１］は『本草序例』や『黄帝内経素問』「平人気象論」を引用した記述ではじまる。

> 「門人問曰、本艸ノ序例ニ曰醫ハ意也。又平人氣象論ニ曰、常ニ以レ不レ病調ニ病メル人一醫ハ不レ病故爲ニ病人一平ニシテレ息以調レ之爲レ法、是何如可ニ心得一」
> （門人問いて曰く、「本草の序例に曰く、醫は意也と。又た平人気象論に曰く、常に病まざるを以て病める人を調（うかが）う。医は病まず。故に病める人の為に息を平にして以てこれを調（うかが）うを法となすと。是れ何如に心得るきや」）

まず最初に鍼医としての心構えを問うているのであろう。ここでは適切な診察治療を行うために息を平らかにすることを聞いている。『黄帝内経素問』「平人気象論」にはまた「平人者不病也」とある。「平人」は、気血が調和している健康な人をさしている。平かな息（平息）は、正常で健康な呼吸である。この「平」はまた、この書名の「平常流」あるいは「平生流」と関係があるのかもしれない。

調気法は、まず最初［問答２５］に口を丸く開け「阿阿阿……」と声の続くほど張り、歯を六七度叩き（叩歯）、生じた唾液を呑み、気を静めて後これを繰り返すという方法が記される。次に［問答２９］からは『針灸大全』より奥旨を得て考案した「八法九道の法」という調気法が示される。それは、「細キ竹ノ二寸計ナル管ヲ以」と竹の管を用い口の周りの八方向に吹く独特の呼吸法（調気法）である。

また［問答２４］では、先師より伝わり、工夫を加えた方法で、難治の病を退くこともできるという。

---

40 前掲書、p. 10。
41 前掲書、p. 11。

「是、則先師ノ法ニシテ、愚按シ數年來工夫シテ、機ヲ調、人ニ傳テ久ク、難治ノ病等ヲ退テ、其效全如神。其法多念ナク、氣ヲ充ル時ハ、一二月ノ間ニ諸病退ト云トモ、其修ル精氣ノ充ニ種々ノ法アリ」

（是れ、則ち先師の法にして、愚按じ数年来工夫して、機を調え、人に伝えて久しく、難治の病等を退けて、其の効全きこと神の如し。其の法多念なく、気を充ちる時は、一二月の間に諸病退くと云ども、其の修むる精気の充つるに種々の法あり）

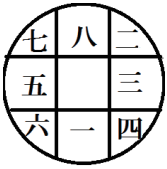
調気法は、主に健康を目的とする場合と、各症状を改善するための場合に分けて書かれている。以下の表１がそれである。

表１「平常流機道問答の調気法」

一ノ気	口を円に明けて阿々阿々とはる。其後管を口にくわえ口の下え図の如く成るように、随分下あごへ付るように、気をつよくつめて、そろそろと、気を吹くべし。其後歯をたたき津を呑むべし。
二ノ気	其後管を、口の左の上の方えなるように、気をつめてそろそろと気を吹くべし、此の如し気をはりて、後歯を叩き津を生じて呑べし。
三ノ気	管を左の中央へ、図如くなるようにして、気を充ちて、つよく息をつめ、そろそろと気を吹くべし。前の如し。
四ノ気	管を左の下へなるようにして、気を充ちて、つよく気をはりて、そろそろと気を吹くべし。
五ノ気	右の中央へ、図の如く気を充ちて、つよく気をつめ、そろそろと気を吹べし。
六ノ気	右の下の方へ、図の如くなるようにして、気をつよくつめて、気を吹べし。
七ノ気	右の上へ、如図上へ成るようにして、気を充ち、つよく気をつめて、そろそろと気を吹べし。
八ノ気	中央上へ図の如く、上へなるようにして、気を充ち、気をつよくはりて、気をそろそろと吹くべし。
頭痛	七気の法を以って、気を充ちて可なり。
左の足痛	右の六の気の法を以、気を吹きて痛所をさりてよし。
右の足痛	左の四気の法にて、気を充ちてよし。
左の肩痛	右の五気の法にて、気を吹きて充ちてよし。
右の肩痛	左の四気の法にて、吉し。
偏頭痛	左の二気の法にて、気を充ちてよし。偏頭痛は左右とも可なり。
風熱強頭痛	右の五気の法にて、気を吹きて可なり。

右手痛	三の気法にて、気を充ちて吉。
淋病	一の気の法にて、気を吹きて吉。
小便ちかく難義	一の気の法を以って、気を充ちてよし。
胸の痛	三の気の法を以って気を充ち吹きて吉し。四気の法を次にして可なり。
腹痛	一二三四の気を、充ちて気を吹べし。
背痛	三五の気を、充ちて気を吹べし。

原文中の図０２を模式図としたのが図Ｂである。この図のそれぞれの数字のある八方向に向けて息を長くゆっくりと吐くのが一～八の気である。



図Ｂ

［問答３０］において

「九宮ニ形トリ、八卦ノ數ヲ以、脈ノ凝滯ノ形ヲ診テ、其變ニ應シテ、六拾四變ヲ分テ、歳月日時ニ應ス」

（九宮に形どり、八卦の数を以って、脈の凝滞の形を診て、其の変に応じて、六拾四変を分かちて、歳月日時に応ず）

とあるが「至テムツカシキ故、略レ之」（至ってむつかしき故、之を略す）とするため、どのような理論でこの「八法九道の法」が完成したのかは、よくわからない。『黄帝内経霊枢』には第七十七に「九宮八風」篇があるが、これとの関連は不明である。また『鍼灸大全』の奥旨を参考にしたとあるが、これもまたはっきりとした関連性が見えず、どのようにしてここに至ったかは不詳である。

この篇に記載される調気法は、すべて呼気による法である。口を丸く円に開けて「アアアア……」と吐くのが基本形となっている。

「歯をたたき」（叩歯）は古くからある方法[42]で養生法の一つでもある。上下の歯を強くかみ合わせる、歯を叩き津（唾液）を呑むというのは、『遵生八牋』に記載される八段錦導引法[43]などにもみられる。また竹中通蓄『古今養性録』、１６９２年[44]にもある。本書の調気

[42] 顔之推撰、王利器撰『顔氏家訓集解』、新編諸子集成、中華書局、1993 年、p. 356。顔之推『顔氏家訓· 養生』に、「吾嘗患齒、搖動欲落、飲食熱冷皆苦疼痛。見『抱朴子』有牢齒之法、早朝叩齒三百下為良、行之數日、即便平愈」（吾れ嘗て歯を患う、揺動して落んと欲す。飲食熱冷皆な疼痛に苦しむ。『抱朴子』を見れば牢歯の法、早朝歯を叩くこと三百にして下せば良と為すと有り、之を行うこと数日すれば、即便ち平愈す）とある。

[43] 高濂著、趙立勛等校注『遵生八牋校注』人民衛生出版社、1993 年、p. 342 に、「閉目**冥**心坐、握固静思神。叩齒三十六、兩手抱崑崙。……赤龍攪水。津漱津三十六、神水滿口。一口分三……」。『遵生八牋』は中国の随筆書。明の高濂著。20 巻。万暦 19（1591）年自序。

[44] 竹中敬（通庵）撰・竹中厚編次・山田巽校正『古今養性録』、元禄 5（1692）年、京都大学図書館、富士川文庫。

法は道家的な身体技法が取り入れられているように見える。

５．平常流と平生流

表紙題簽にある『平常流機道問答』の「平常流」ではなく「平生流」と表記が変えられている。「平常」と「平生」に違いがあるのだろうか。

日本国語大辞典では「平常（ヘイジョウ）」は「①いつもと同じであること。取り立てていうほどのできごともなく、習慣的で平穏な生活が繰り返されている時。つねひごろ。また、その状態。へいぜい。②他と比べて特別に変わったところのないこと。普通」とあり「平生（ヘイゼイ）」は「ごく普通の状態、状況の中で生活している時。ふだん。つね。平素。平時」とあり『大漢和辞典』でも「平常」は「つねづね。ふだん。平日。平生」、「平生」は「ふだん。ひごろ。平常」とあり、どちらも「平常」と「平生」と同意義とみている。

本書『平常流機道問答』、において「平生」が使用されている箇所を以下に挙げる。

「平生」－１、第十丁オモテ

［平常流機道問答、問答１５］

「經曰不可治ト云ハ、其論ニ至ラサルナリトアリ。醫ハ意ナリト。意ノ道ナリ。別シテ鍼療ナトハ眞釼勝負ト同シ事ナレハ、平生其心得ニテ修行スル時ハ、一切眞實ニシテ信ト心ヲ得テ、無爲ノ行トナリ、其道ヲ行フ時ハ、危カラス。唯信心ンヲ以修行スレハ、眞理ニ至ルナリ」

（経に曰く、治す可からずと云うは、其の論に至らざるなりとあり。医は意なりと。意の道なり。別して鍼療などは真劍勝負と同じ事なれば、平生、其の心得にて修行する時は、一切真実にして信と心を得て、無為の行となり、其の道を行ふ時は、危うからず。唯、信心んを以て修行すれは、真理に至るなり）

「平生」－２、第十四丁オモテ

［平常流機道問答、問答１９］

「問曰、六藝等ノ行動シテ一氣凝滞ナキヤウニスルノ理ヲ知ニハ、其諸道習テ、其理ヲ知ルカ、亦不學して先知ノ理アリヤ。答曰、愚ハ何モ學テ不知ト云トモ知ル所ノ理ハ、人身ノ行動、八法ニ行動スルト云トモ、其體心神精ノ凝滞スル事ナキノ理ヲ知テ、是ヲ機道[45]トナツク、自ラ周身無凝滞ノ理ニシテ心神精氣ヲ全スルノ理ナリ。其理鍼道

[45] 「機道」という語は、『黄帝内経素問』離合真邪篇「不可挂以髪者、待邪之至時而發鍼寫矣。若先若後者、血氣已盡、其病不可下。故曰、知其可取如發機、不知其取如扣椎。故曰、知機道者、不可挂以髪不知機者、扣之不發此之謂也。」（髪を以て挂くべからずとは、邪の至る時を待ちて鍼を発して写すなり。若しくは先んじ若しくは後るるとは、血気已に尽きて、其の病下すべからざるなり。故に曰く、其の取る可きを知るは機を発するが如く、其の取るを知らざれば椎を扣（たた）くが如し、と。故に曰く、機道を知る者は、髪を以て挂くべか

修行ノ内ヨリ考タル者ナレハ、鍼道機道ト名付テ、兩用倶ニ心神精氣ヲ全スルノ理ヲ以平生流ト名付ク。是平カニ生ルト云ノ義ナリ。其理皆古書ニヨリトコロ有リト云トモ、其言論廣ケレハ是ヲ略ス。唯一氣ノ平生トナルノ理ヲ考、自得シタル故、其効アルヲ以一流ノ奥義トス。故狐疑スル者ハ、其効ナシ。狐疑スル者ハ一流ヲ得事カタシ。無狐疑信心ンヲ以無心ノ機ヲ得ル時ハ八法ノ働ノ理ヲ知ル事疑ナシ」

（問うて曰く、六芸等の行動して一気凝滞なきようにするの理を知るには、其の諸道習いて其の理を知るか。亦た学ばずして先知の理ありや。答えて曰く、愚は何も学びて知らずと云えども、知る所の理は人身の行動、八法に行動すると云えども、其の体心神精の凝滞する事なきの理を知りて、是れを機道と名づく。自ら周身凝滞無しの理にして心神精気を全くするの理なり。其の理、鍼道修行の内より考えたる者なれば、鍼道機道と名付けて、両用倶に心神精気を全くするの理を以て、平生流と名付く。是れ平かに生きると云うの義なり。其の理、皆古書によりどころ有りと云えども、其の言論広ければ、是れを略す。唯一気の平生となるの理を考え、自得したる故、其の効あるを以て、一流の奥義とす。故に狐疑する者は其効なし。狐疑する者は一流を得る事かたし。狐疑無き心んを以て、無心の機を得る時は、八法の働きの理を知る事疑いなし）

「平生」－３、第三十丁

［平常流機道問答、問答３５］

「問曰、八法ノ氣ヲ以管ニテ氣ヲ充其凝滞ヲ解ノ理有ヤ。答曰、前ニ言フ如ク、管ノミト心得テハ其意得難シ。此理ヲ挨（按）ル事、多歳ニシテ自得シタリ。呼吸ハ陰陽也。口ヲ強ク閉ル吽ナリ。ソレニ管ヲアテヽ少ツヽ氣ヲ吹ハ、是阿ナリ。阿吽、是陰陽也。出ニ非入ニ非ノ一氣也。此ノ一機周身八方凝滞ナク充シムル時ハ、周身自然ノ一機ニシテ妙要ノ信心ンヲ得事疑ナシ。自ラ十方凝滞ノ氣解テ、平等トナル。是、氣ヲ平ニスルノ一理也。故九道ノ脈、奇經八脈、十二經、十五絡、二十七氣ノ理ヲ、考合テ一流ト名付テ、平生流ノ機療ト云フ。此道、則機道也。陰陽ハ、名有テ形ナシ。理ヲ以知、管ニテ吹ノ理、尺八、セウ、シチリキ、ヲウテキ、ホラ貝、横笛等ニ至ルマテ、心ヲ付テ可考。一切口ニテ吹ク嗚（鳴）モノ等、一切コエツカイ等ノ理ヲ、知ルカヨシ」

（問うて曰く、八法の気を以て、管にて気を充つる、其の凝滞を解くの理有りや。答

らず、機を知らざる者は、之を扣けども発せず、と。此れをこれ謂うなり。）や、『黄帝内経霊枢』九鍼十二原篇「刺之微、在速遲。粗守關、上守機。機之動、不離其空。空中之機、清静而微。其來不可逢、其往不可追。知機之道者、不可掛以髪。不知機道、叩之不發。」（刺の微は速遅に在り。粗は関を守り、上は機を守る。機の動は、其の空を離れず。空中の機、清静にして微なり。其の来たるや逢うべからず。其の往くや追うべからず。機の道を知る者は、髪を以て掛くべからず。機道を知らざれば、之を叩けども発せず。）などに見える。これらの「機道」と本書でいう「鍼道機道」の「機道」との関係は稿を改め考察したい。

えて曰く、前に言う如く、管のみと心得ては其の意、得難し。此の理を按ずる事、多歳にして自得したり。呼吸は陰陽なり。口を強く閉る吽なり。それに管をあてて少しづつ気を吹くは、是れ阿なり。阿吽、是れ陰陽也。出ずるに非ず、入るに非らざるの一気なり。此の一機、周身八方凝滞なく充たしむる時は、周身自然の一機にして妙要の信心んを得る事、疑いなし。自ら十方凝滞の気解けて、平等となる。是れ、気を平にするの一理なり。故に、九道の脈、奇経八脈、十二経、十五絡、二十七気の理を、考え合せて一流と名付けて、平生流の機療と云う。此の道、則ち機道也。陰陽は、名有りて形なし。理を以て知る。管にて吹くの理、尺八、笙、ひちりき、おうてき（横笛）、ほら貝、横笛等に至るまで、心を付けて考うべし。一切の口にて吹く鳴りもの等、一切のこ(声)え(使)づかい等の理を、知るがよし）

「平生」－４、第四十六丁オモテ
［平生流機道秘書、篇名］
「平生流機道秘書」

「平生」－５、第五十丁オモテ
［平生流機道秘書］
「曰平氣ハ平等不二ノ體氣ナリ。故平氣ノ變ル。後ニ誌ス大勢氣ハ修ノ體陽ニシテ、平生修之、體機ナリ。先ツ大勢氣修シテ萬機ヲ診ムヘシ。大勢氣ハ後天也。平氣ハ先天ナリ」
（曰く、平気は平等不二の体気なり。故に平気の変る。後に誌す大勢気は修の体陽にして、平生、之を修む、体機なり。先ず大勢気修して万機を診むべし。大勢気は後天なり。平気は先天なり）

つぎに「平常」が使用されている文を挙げる。

「平常」－１、表紙
［題簽］
「平常流機道問答」

「平常」－２、第一丁オモテ
［平常流機道問答、篇名］
「平常流機道問答」

「平常」－３、第四十七オモテ
［平生流機道秘書、一氣］

「〇一氣∞[46]平氣ハ〇、其無心ナル心持ニテロヲ一文字ニシテ歯ヲ合セ上歯クキニ舌ヲ付テ見ルニ、是則無心也。其唇ノツヨカラス、ヨハカラス、平等成ル所、是則、平氣ニシテ、是ヲ平常ノ守リトス。行住坐仆此一氣ニ止ル也。此一氣則兩義ヲ生ル也」
（〇一気、∞平気は〇、其の無心なる心持ちにて口を一文字にして歯を合せ、上歯ぐきに舌を付けて見るに、是れ則ち無心なり。其の唇のつよからず、よわからず、平等成る所、是れ則ち、平気にして、是れを平常の守りとす。行住坐仆、此の一気に止まるなり。此の一気、則ち両義を生ずるなり）

「平常」－４、第五十四丁オモテ
［平生流機道秘書、氣ノ部］
「八、平氣ハ口ヲ一ノ字ノ形ニナス。是平氣也。強カラス、弱カラス、平等ヲ以、平常ノ守リトス。行動座和トモニ用之。萬事效有リ」
（八、平気は口を一の字の形になす。是れ平気なり。強からず、弱からず、平等を以て、平常の守りとす。行動座和ともに之を用う。万事に効有り）

以上をみると、「平生」は５箇所、「平常」は４箇所で使われている。詳細に、これをみると「平生」－１と「平生」－２、「平常」－３と「平常」－４は辞書と同様の「つねづね、ふだん」の意味で使われていると思われる。

これらを除外して考えてみる。

「平生」－２は「平かに生きると云うの義」「平生流と名付く」「一流の奥義とす」。

「平生」－３は「一流と名付て、平生流の機療」。

「平生」－４は「平生流機道秘書」という篇名に使われる。

「平常」－１は、表紙にある書名。

「平常」－２は「平常流機道問答」第一篇の篇名である。

これらを考え合わすと、この流派の奥義書が「平生流機道秘書」であるということになるのではないだろうか。つまり例えば「平常流機道問答」が初伝とすれば、ステップアップして奥伝「平生流機道秘書」へとすすめる。「平常流」の奥義を言うとき「平生流」と呼んだのではないだろうか。[47]

６．小結

「平常流」という流派は、どのような流派であったのだろうか。

鍼道「平常流」は管見の限り、現存していないようであるし、また記録もない流派である。中世以降近世には、無名無数の流派は存在していたと思われる。ただし記録された書

---

[46] 「∞」はこれに似た形の口の形の図を描いているが、ここでは「∞」を代用し略す。
[47] この「平常流」と「平生流」の意義については、森ノ宮医療大学、横山浩之氏よりご意見をいただいた。

物があるとは限らないし、書かれていたとしても現存しているとは限らない。当然注目もされず忘れられた流派も多かったであろう。だからと言って流派自体の存在を否定することも出来ない。本書『平常流機道問答』では、「鍼」の語が３０回も繰り返され、鍼の流派であることを強調していることから、鍼灸の流儀書であると考えてもよいだろう。

しかし鍼道の流儀書でありながら、調気法（呼吸法）のみを記載するなど、他の流儀書とは大きく異なる。数々の医書名を上げ、込み入った理論を強調するが、一方その理論の詳細を略するというのも特徴的である。仏教の影響も感じられるが、陰陽五行、易、老荘思想を多く取り入れている。その調気法（呼吸法）も、鎌田が「調息法の継承と発展」で論じる「江戸期から近代へと継承」されているという、いわゆる丹田呼吸とは少し違うように思われる。数々特異な点が多い。

一方、一気凝滞についていえば、後藤艮山の影響だというには、明確な根拠がない。むしろ後藤艮山と本書は、時代は多少隔たるが同じような何かの影響により、一気凝滞（留滞）という病因論に達したとは考えられないだろうか。そうであるなら、これを解明することが出来れば古方派の淵源の手掛かりを見つけることが出来るのかも知れない。

また「平常無敵流」とよく似た名を持つ流派が剣術にはあったようである。『谷神伝平生無敵流』[48]という流儀書をもつ剣術「平常無敵流」[49]との関係性の有無についても、「師」の「圓水」についても未調査であり、多くの疑問点が残ったままである。本稿では調気法について充分検討できなかった。他の調気法、導引法の諸本もあわせて検討する必要がある。今後残りの二篇も翻字した上、稿を改め考究をすすめたい。

参考文献（著者あいうえお順）

一次資料

一休宗純撰『一休骸骨』、早稲田大学図書館所蔵。

滑寿『難経本義』、吉野屋徳兵衛、天和 4（1684）年、早稲田大学図書館所蔵。

竹中敬（通庵）撰・竹中厚編次・山田巽校正『古今養性録』、元禄 5（1692）年、京都大学図書館所蔵。

無名『平常流機道問答』、末尾に「安永四」（1775）年、慶応大学所蔵。

山内流斉著、吉田有恒手写『谷神伝平生無敵流』、天保 5（1834）年、富山県立図書館所蔵、（未見）。

参考図書

浦山きか『中國醫書の文獻學的研究 』、汲古書院、2014 年。

---

[48] 山内流斉著、吉田有恒手写『谷神伝平生無敵流』、天保 5（1834）年。富山県立図書館蔵。未見。

[49] 渡辺誠「谷神伝（平常無敵流）－僧、絵師、医師が伝えた剣－」『月刊剣道日本』1982 年 1 月、1982 年、口絵、pp. 84-91。この資料は森ノ宮医療大学、横山浩之氏より提供頂いた。

大浦慈観、長野仁『皆伝・入江流鍼術―入江中務少輔御相伝針之書の覆刻と研究』、六然社、2002 年。
大塚敬節、矢数道明編『艮山先生遺教解』『近世漢方医学集成 13』、名著出版、1979 年。
大塚敬節、矢数道明編『師説筆記』『近世漢方医学集成 13』、名著出版、1979 年。
金谷治訳註『荘子　第二冊（外篇）ワイド版』、岩波書店、1994 年。
鎌田茂雄『気の伝統―調息法を中心にして―』、人文書院、1996 年。
顔之推撰、王利器撰『顔氏家訓集解』、新編諸子集成中華書局、1993 年。
高濂著、趙立勛等校注『遵生八牋校注』、人民衛生出版社、1993 年。
国書研究室編『国書総目録』補訂版第 1 刷、岩波書店、1989-1991 年。
小曽戸洋『日本漢方典籍辞典』、大修館書店、1999 年。
朱橚『普済方』景印文淵閣四庫全書、第 747-761 冊、驪江出版社、1988 年。
創医会学術部『漢方用語大辞典』、燎原、2001 年。
孫思邈『千金要方』曹柄章編『中国医学大成続集 11』、上海科学技術出版社、2000 年。
中医大辞典編纂委員会『中国医学史レファレンス辞典 』、白帝社、2011 年。
張介賓『張氏類經』、新文豊出版公司、1976 年。
西晋一郎、小糸夏次郎『太極図説・通書・西銘・正蒙』、岩波書店、1986 年。
日本内経医学会『素問』、日本内経医学会、2004 年。
日本内経医学会『霊枢』、日本内経医学会、2006 年。
日本内経医学会『難経』、日本内経医学会、2007 年。
白隠慧鶴原著、芳澤勝弘訳註『夜船閑話』、白隠禅師法語全集 4 禅文化研究所、2000 年。
花輪壽彦『後藤艮山』、漢方医人列伝協和企画、2015 年。
富士川游『日本醫學史』、眞理社、1952 年。
真柳誠『黄帝医籍研究 』、汲古書院、2014 年。
宮澤正順『素問・霊枢』、中国古典新書続編 18 明徳出版社、1994 年。
無名『卍庵仮名法語』、禅宗編纂局編『禅門法語全集』第八篇貝葉書院、1896 年。

参考論文

笠井哲「白隠の丹田呼吸法の系譜」『印度學佛教學研究』51(2)、2003 年、pp. 688-693。
片渕美穂子「気めぐる身体―近世前期養生論における陰陽五行―」『和歌山大学教育学部紀要　人文科学』第 60 集、2010 年、pp. 47-57。
片渕美穂子「近世養生思想における呼吸法と丹田」『和歌山大学教育学部紀要、人文科学』第 64 集、2014 年、pp. 111-119。
舘野正美「〈医は意なり〉攷―医学思想的観点から―」『日本医史学雑誌』第 45 巻第 1 号、1999 年、pp. 134-135。
舘野正美「孫思邈の医学思想」『研究紀要』100、2020 年、pp. 21-42。
野村英登「白隠の修養法と道教の錬金術―内観・軟酥の法と内丹―」『花園大学国際禅学

研究所論叢』第一号、2006 年、pp. 247-265。
袴谷憲昭「道歌と仏教文学」『駒澤大學佛教文學研究 21』、2018 年、pp. 117-140。
山崎律子「平野重誠の呼吸法に関する一考察―江戸時代後期の著『病家須知』を中心に―」『福岡県立大学看護学研究紀要』8（2）、2011 年、pp. 61-66。
渡辺誠「谷神伝（平常無敵流）―僧、絵師、医師が伝えた剣―」『月刊剣道日本』1982 年 1 月、1982 年、口絵、pp. 84-91。